
聖獣の愛し子

縁起屋こまり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖獣の愛し子

【Nコード】

N0060N

【作者名】

縁起屋こまり

【あらすじ】

鳥も渡れぬ深山の頂には龍が住む。

手にしたものは天を得るとも伝えられる龍の秘宝を求める男 司馬十座は山中で妖と暮す娘 真白と出会う。頂へと続く唯一の門を守護獣に締め出された十座は、やむなく真白と生活を共にすることになるのだが。

「死んだ奴の分までなんて生きられない。大切なのは、助けられた命が尽きるまで自分の分を生きることだけだよ」

復讐のため全てを壊そうとする男と、復讐を捨て全てを守ろうとする

る女の出会いの果ての物語。

序文（前書き）

文中に、若干の暴力表現がございます。
苦手な方はご遠慮ください。

序文

その門の名を左右門という。

眼前の門をくぐれば、目的の場所が近いことは分かっていた。

二層五間三戸。

見上げるほどに巨大な堂々たる双子門は、もうすぐ手の届くほど近くに見えた。

なのに。

「なぜ、近づけない！」

苛立ちのあまり、男はぎりつと奥歯を噛みしめた。

刀はどっぷりと血にまみれていた。すらりとした体を染める返り血は、厚く固まって黒く変色してはじめている。白刃が鞘から引き抜かれてからもう小半時。それから何体の妖を屠ったのやら、すで見当もつかない。纏いつくように襲いかかる妖たちを斬り捨てながら、男は確実に歩を進めてきたはずだった。

なのに、少しも近づけた気がしない。

近づくほどに遠ざかる。なぜなのか考える間もなく、妖たちは数を増してゆく。男の足元には累々たる屍骸。力なく飛び立とうとするもの、ぴくりともせぬもの。努めて淡々と、男は周囲に屍の山を築き続けてきた。

むせかえるような血の匂い。

その匂いに陶然として、妖たちは男を十重二十重に取り囲み、我先にと殺到する。力の差は歴然だったが、妖の数はすでに尋常ではない。仲間の屍に怯むこともなく、次々男に襲いかかる。

姿のいい男だった。

腰ほどまである黒髪は無造作に束ねられ、男が動きたびひらひらと翻った。人形のように整った相貌に氷のように冷たい目をしている。

驚くべき手練といえた。妖のありとあらゆる攻撃を軽々とかわし、無造作になぎ払う。正確無比な動きは、まるで舞を舞っているかのように優雅だ。

しかし、時は確実に過ぎる。

疲労の色は音もなく、そして確実に男を蝕みつつあった。勝敗はもはや時間の問題。飛びかかる翼妖をかわしきれずズルリと後ずさった時、足元の血だまりに男は大きく足を取られた。たたらを踏んで踏みとどまろうとするが、できない。

「くっ！」

男は体制を崩し、頭から地面に叩きつけられた。

「・・・こ、んな・・・ところ、で・・・」

無念、とただ一言。

妖たちが上げる歓喜の雄叫びを聞きながら、男はゆっくりと意識を手放した。

白い髪の娘

目を覚ました時、日はすでに大きく西に傾いていた。

司馬十座しうまじゅうざは、薄く眼を開いて周囲にすばやく目をやった。夕日に照らされた室内に、家具らしきものはほとんどない。あるのは朱塗りの長持が一棹と壁に掛けられた織物一つきり。剥き出しの岩肌に掛けられたその大きな織物には、金色の巨大な竜と赤と黒の鹿に似た獣が二頭織り込まれている。そのあまりの見事さに、十座は少し見惚れた。

余程の名人の作なのだろう。三頭の獣は、まるで今にも飛び出して天駆けて行きそうである。

見渡せば壁面も天井もむき出しの岩肌。大きな洞穴を利用した住居なのだ。その入り口近く、乾燥した草を積み上げた寝台の上に、十座は寝かされていた。

生き物の気配はない。

十座は慎重に身を起こすと、止めていた息をそつと吐き出した。素早く自分の体を検分してみる。傷はきれいに治療され、致命傷になるようなものは見当たらなかった。愛用の刀を探すが、こちらも同じく見当たらない。

生きてはいる。

今のところ、まだ。そう呟くと同時に襲いかかる剣呑な気配に反応し、十座は音もなく寝台を降りた。

「起きたの？」

目覚めない方が良かったとも言いたげな、冷ややかな声音だった。

扉の先から現れたのは若い女。女の髪は白く、額には深くえぐら

れたような無残な爪痕が伺える。多く見繕っても二十歳より二つ三つ下の、まだ幼さの残る顔に深い怒気を滲ませて、女は十座を睨みつけた。

「俺の刀はどこだ」

油断なく十座は尋ねた。見たところ女は丸腰のようだが、敵か味方か分からない以上、安心などできはしない。

女は無言で部屋の隅にある長持に手をかけると、中から布に包まれた細長い物を取り出して無造作に投げ寄越した。十座はそれを片手で受けて、素早く布を開く。現れたのは手に馴染んだ一振りの刀。十座は刀を握り締めると、わずかにホツとした顔をした。

「あなたは殺しすぎる」

視線を十座に据えたまま、女は言った。

「屍が山になるほどなぜ殺した」

「殺さなければ殺されていた。俺はこんな所で死ぬ気はない」

「あなたの腕なら逃げられたはず。なぜ、あんなにも血を流す必要があったの？」

「逃げる暇はなかった」

「嘘だ」

即座に女。

逃げられなかったのではなく逃げなかったのだと断じる。その真っ直ぐな瞳がどうにも鬱陶しくて、十座は軽く眉を寄せた。

女の言うことは正しい。

血のおいに酔っていたのは妖だけではなかった。妖の体を切り刻み、その目をえぐり、断末魔の声を聞く。堪らない快感と尽きぬ

高揚感に十座は酔った。命尽きるまで殺しつくしたい。あの時確かに十座はそう思ったのだ。だが、それを話すつもりは毛頭ない。

「なにも人を斬ったわけじゃない。妖なんぞ何匹斬ろうが、文句を言われる筋合いはない」

「人里だったらそうかもしれない。でもここは妖の里なの。ちゃんと理があって生きているものを、無為に傷つけていい場所じゃない。勝手に入り込んで、人の理を持ち込まれるのは迷惑だよ」

「やけに妖の肩を持つな、女」

「お前妖か、と問えば、

「だったらどうするの」

女はすつと唇を歪め、挑むような目を向けた。

「斬る」

助けてくれたのが誰であろうが、殺気に向けてくる相手は全て敵だ。

十座は抜刀し、一気に間合いを詰めた。躊躇もなく女のうなじに白刃を滑り込ませて

「やれやれ、つくづく物騒なお人だ」

間延びした声がした。

赤い妖

「やれやれ、つくづく物騒なお人だ」

絶妙の一手は、しかし突如現れた見知らぬ男に目前で止められていた。

十座の両目が怒気を湛えて男を射抜く。

「貴様、何者だ。いつ湧いて出た」

「湧いて出たとはまた酷い。それでも命の恩人ですよ。あなたのね」

「恩人だと…貴様が？」

胡乱な目で見る十座に、男は「はい」とのんびり答えるとニコリと笑った。

背がおどろくほど高い。年の頃なら十座と同じくらいの、艶やかな赤毛の男である。つり上がった両目も同じく血のように赤い。その浅黒い額の真中に、盛り上がった突起

角だ

が一つ。

この男、人ではないのだ。

「恩人だからといって、恩着せがましいことは言いたくないですが、血に狂った妖たちを追い払うのは、それはもう大変だったんですよ。その上、傷の手当てをして寝床も与えて。それで殺されては堪りません」

「助けてくれと頼んだ覚えはない」

「確かに頼まれた覚えはありませんが、あなたは命の恩人殺して寝覚めが悪くはないんですか」

呆れたような物言いは、まるで世話話の延長のような気軽さだ。十座はぐつと奥歯を噛みしめた。赤毛の男は丸腰だった。男は素

手で十座の手首を押さえ、寸前で刀を止めていたのだ。ギリギリと骨の軋む音がする。大して力を入れているようにも見えないのに、十座は腕をぴくりとも動かせない。並の腕力ではないのだ。

「恩人だと。ふざけるな。貴様は妖だろう。妖なんぞ何匹切ろうが、寢覚めが悪くなるはずがない。その女も大方化け物、妖物の類なのだろう。行きがけの駄賃だ。女も貴様もまとめて斬る。妖は敵だ」「化け物…それはまた、聞き捨てならぬことをおっしゃる」

一瞬で空気が冷えた心地がした。十座は喉元からせり上がってくる恐怖心と闘いながら、唇を噛んだ。どうやら言ってはならぬことを言ってしまったらしいが、そんなこと知ったことか。赤毛の男は口元に笑みを湛えながら、万力の様に十座の手首を絞めつけにかかる。そのあまりの痛みに、十座の喉から悲鳴が漏れる。

「ぐあっ！」

「確かに私は人ではない。しかし、私も、そしてこの娘もあなたほど血で穢れてはいませんよ。その様に血にまみれた手をして我らを化け物と呼ぶあなたは、それでは一体何なのでしょう。人でありさえすれば、どんな無体も許されるともおっしゃるか」

凄まじい力だった。十座はもはや声もなく、血の気の失せた顔に苦痛の色を浮かべてひたすら耐えるばかりだ。

「黙れっ！…くッ」

「折角助けてさしあげたのに、なんとまあ助け甲斐のないお人だ。それとも、恩を仇で返すのが人の流儀なのですか」

「う、るさい。…妖の、言うことな、ど、聞く耳…持た…ん」

「人の話は聞けても、妖の話は聞けないとおっしゃる」

「当…たり前…だ」

苦痛に顔をゆがめながらも、十座は男を睨みつける。その暗い闇のような眼差しに、男がずっと目を細める。

「……炎駒^{えんく}、もういい。離してあげて」

静かで悲しい声だった。女の声が聞こえた途端、十座の腕が自由になる。男が手を離れたのだ。支えを失った十座は、がっくりとその場に肘をついた。

男　炎駒はその様子を冷やかに見下ろすと、振り返って女の方に向き直った。ゆっくりと手を伸ばし、その白い髪を優しく撫でながら、

「顔を上げて下さい、真白^{ましろ}。そんな顔しないで。もう何もしませんから」

そう言って何事もなかったような顔で、俯く女に微笑みかけた。

「うん…分かってる。ありがとう」

女　真白はなぜだか今にも泣きそうな顔をしていた。その顔に、十座は湧き上がるような強い憤りを感じてまなじりを吊り上げた。

「なぜお前が礼を言うんだ。それに、もう何もしないだと。なら俺が今ここで貴様らを殺してやろうか」

十座はゆらりと立ち上がると、両手で刀を構えなおした。炎駒に握られていた腕がジンジンと痛むが、構っている余裕はない。

妖は敵だ。

人語を解するほど力の強い妖の言うことなど、到底信用できはし

ない。助けられたのは事実だろうが、そこに裏がないと思うほど十座はお人よしではなかった。なにより、この妖はどうしようもなく胡散臭いのだ。

赤毛の妖は、いかにも面倒くさそうに肩をすくめると、

「どうします、真白。この人間、本気で私たちを斬る気ですよ。だつたらいつそのこと」

スツと手で首を切る振りをする。

「やっちゃいますか」

「できない事言うな、炎駒。兎に角、私は御免だよ。せつかく助けたのに傷つけるなんてできない。そういうのは 嫌だ」

真白は形の良い眉を顰めて、吐き捨てるように言った。

「そうですね。私も殺生は嫌です。……真白は本当に良い子だ」

このいけすかない人間と違ってと炎駒が笑うと、真白は「当たり前だよ」としかめ面した。

「こんなのと一緒にされたら迷惑だから」

門の守護者

「おい……お前ら、なにを企んでいるかは知らんが、俺をあまり怒らせない方が身のためだぞ」

一緒にするなと言う言葉は、十座を心底苛立たせた。十座は刀を正眼に構えると、ぐっと目の前の男女を睨みつける。

「どちらかといえば、怒らせてるのはあなたの方なんですけどね」
「なんだと……」

「もう二人とも、いい加減にして」

殺気立つ人と呑気な妖の間に、割って入ったのは白い髪の娘だ。

真白はウンザリした様に言うと、驚くほど無造作に十座の前に立ちはだかった。十座がすつと目を細める。

「斬りたいのか、女」

「ああ？もうあなた嫌い。斬りたければさっさと斬ればいいよ。でも、これだけは言っておくから。私を斬れば、あなたは永久にあの門をくぐれなくなる。山頂に至る道はあそこだけだから、門を通れなければどのみちあなたは龍には会えない。それでも良いなら、好きなだけ斬り刻めばいいさ。あなたほどの腕ならそれくらい簡単だろう、人間」

よほど腹を立てたのだろう。まず自分から斬れと言わんばかりに、真白はさらに間を詰める。

「……お前を切れば門をくぐれなくなるだと。どういう意味だ、女」

十座は目を眇めると、さっと真白に剣を向けた。脅してはい証拠に、剣先が首筋を滑ってずっと赤い血が滲んだ。鋭い殺気は本物で、少しでも怯えて身を引けばすぐさま首が落ちるだろう。しかし、真白はひるむ様子もなくただ静かに佇んでいる。

「どういう意味ってそのままの意味だよ、人間」

真白はきっぱりと言って十座を睨み返した。その強い眼差しに、流石の十座も動きを止める。しばしの逡巡の後、十座は無言で剣を下ろし不愉快そうに舌打ちした。それにすばやく反応したのは炎駒だ。

「あなたねえ、私の真白になにをするんです。それ以上手を出せば、あたななど一生門を通しませんよ。それから、真白。短気起して本当に斬られたらどうする気ですか。自重してください」

「炎駒うるさい。どうせ斬り合いにでもなったら、私にコレの相手をさせるつもりだったくせに」

十座を指刺しながら、真白が拗ねたように言う。

「ええ、まあ、それは確かにそうなんですけど。でも、仕方ないじゃないませんか。麒麟に穢れはご法度。この無駄に顔のいい人間も一応生き物の範疇ですし。殺生なんかした日には、私の方が死んでしまいますよ」

「そんな事言って自分ばかりズルイ。殺生なんて、私だってご免なのに」

「だから、本当に殺せとは言っていないじゃないですか。ちょっとこつ、二度と変な気を起こさない程度にボコボコに」

「無理。できない。私そんなに器用じゃないし」

「まあ、そうおっしゃらずに」

と、まるで無頓着に会話を続ける二人に、十座は呆然と立ち尽くし、次いで目を見張った。

「…お、おい、お前ら。いい加減にしないと本当に斬るぞ。それに、こいつが麒麟だと……門をくぐれなくなるってどういうことだ。それに龍…くそつ、一体なにがどうなってるんだ！」

いいから説明しろ。十座は叫んだ。

「だから言った通りだよ、人間。この赤いのは妖じゃない。麒麟だよ。あなたのような穢れたバ力を通さないのが役目の、あの門の守護獣なの」

「もう、赤いのって何ですか。赤いのって。私にも名前がありますから、名前で呼んでいただきたいですね。真白は意外に意地悪です」

炎駒は如何にも心外だといわんばかりに頬を膨らませた。その子供じみた仕草と麒麟という言葉がまるで結びつかない。

麒麟は神聖なる生き物。瑞獣である。その性質穏かにして、虫、草に至るまでその生を奪うことを悉く嫌うという伝説の神獣。生き物すべての長であり、人にとっては信仰の対象。つまりは神にも等しい相手のはずで。

「この妖が……麒麟？」

「そうです。私が麒麟です」

絶句する十座に、赤毛の男はこっくりと頷いた。その当の伝説は、子どものように頬を膨らませて真白に抗議したかと思うと、十座に向きなおって一転くそ真面目な顔をした。

「申し遅れましたが、私、二の守り左門の守護獣、赤麒麟せつきえんくと申します。あの門はこの山に穢れを持ち込ませないための、いわば結界の役目を果たすもの。あなたが近づけなかったのは、そのためなのです」

「結界：それで」

近づくほどにあの門は遠ざかった。血にまみれた十座を拒むように。

「私はその結界を守護する二頭の麒麟の片割れ。そして、こちらが私たちの大切な真白。私のことは炎駒でも赤麒麟でも好きなように呼び下さい。ということ、よろしく願いしますね」

炎駒は勝手に二人分名乗ると、啞然とした表情の十座の耳元について唇を寄せた。

「ついでに言うておきますが、あの結界は人には決して破れません。あなた山に入りたいのでしょうか。それなら、私たちの門を通る以外に道はありませんよ」

麒麟はそう小声で呟くと、ニヤリと人の悪い笑みを浮かべた。

殺戮の代償

鳥も渡れぬ、といわれるこの山の頂には龍が住む。

四神の長たる黄色の龍。黄龍である。

山の中腹に数多ある険しい谷のいずれかには、竜の住処へ通じる巨大な門があるという。

その名を左右門。

二層五間三戸の双子門を守護するのは、二頭の聖獣。麒麟である。

麒麟は元来仁の生きもの。通過を願い出る者がどのような者であれ、その心の有り様に仁なくば決して門を通ることを許さぬという。

龍は、門を通り尋ね来たその者の魂を見極める。見極めた末に、術に優れた者にはその眼を、技に優れた者にはその爪を、それぞれ下賜するといわれる。

人の歴史は伝える。

龍眼。

その得たるもの、並びなき呪術の使い手とならん。天を使役し、その理をわがものとするなり。

同じく、龍爪。

その得たるもの、並びなき剣の使い手とならん。その刀清くして、人、妖、霊にいたるものすべてごとく打ち砕かん、と。

手にしたものは天を得るとも伝えられる龍の秘宝を求める者は数多い。

この男、十座もその一人。

炎駒の額の角は薄ぼんやりと輝いていた。

「・・・知らぬ事とは言え大変失礼いたしました。麒麟がこんなに・・・その、気さくな方だとは思いませんで」

茫然自失の後、苦心惨憺して十座は言った。何しろ、麒麟に刃を向けてしまったのだ。自分がかかなりまずい状態にあることは理解したが、さりとてどうすればよいのやら見当もつかない。自然、ためいきが洩れる。

「分かってくださればいいんですよ。分かってくだされば」

私気さくな麒麟ですし、とこちらは上機嫌に炎駒。

「言っとくけど、ソレ誉められてないからね、炎駒」
「そうなのですか？」

「あ、いや、俺・・・いや私は誉めたつもりです。それでお願いなのですが・・・門を通してはいただけないでしょうか」

結局、十座は率直に　言い訳しても無駄だと判断したのだ

聞いた。

微笑もうとしたが上手くいかず、仏頂面のままである。麒麟の機嫌を損ねるわけにはいけないが、できないものはしかたない。

「ああ、それは無理です」

案の定、炎駒は言った。

「なぜです」

「なぜとおっしゃられても、土台無茶なお話ですから。先ほども申し上げましたが、私は門番です。神聖な山に穢れを入れないようにするのが私の役目。これでも職務には忠実なんですよ。門の守護者として申し上げれば、あなたのような方を通すなどできない相談です。あなた、門前をすごく穢してくれましたし、邪な気満々ですし」

出直して下さい。麒麟はあっさり言った。

「それこそ無理な話です。俺はここまで龍に会いに来たんです。あとわずかの所だというのに、こんなところでおめおめ帰るわけにはいかない」

「その様な顔をなさっても駄目なモノは駄目。無理をおっしゃらないでください。あなたのおやりになった無体の所為で、これから私がどれだけ苦労すると思ってるんでしょうか。正直申し上げます。ま、軽く見積もって人の時で十年ほどはかかりましょうか」

「十年・・・そんなに」

十座は蒼白で声もない。

「限りある人の身で、十年待つのは大変なことです。諦めてお家に

お帰りなさい」

「そうだよ。門を通れなくても、別に死ぬわけじゃないんだ。あなたは知らないだろうけど、この山は門を通ってからが悪路に難所続きなんだから、むしろ助かったと思えばいい。世に、命に勝る宝なしと言っだろう。それに、そうは見えないかもしれないけど、麒麟は会うだけでも運氣が上がるという大層縁起が良い生き物なんだよ。山を下りてくじでも買うといい。きっと当たるから」

そうは見えないとはどういうことでしょうか、と隣で麒麟が愚痴るのを無視して、白い髪の少女は真顔でそう断言した。

「刀が欲しいならその金で買ったらいいいよ。その方が安全かつ確実だし」

「命が惜しいわけでも金が欲しいわけでもないんだ、俺は。それに、金で買える刀では意味がない。必要なのは龍爪刀だけだ。悪いが帰るわけにはいかない。それは・・・それだけはできない」

「なら、当分ずっとここに足止めだけだ」

と真白。刀振りまわす以外能のないやつになにができるかと容赦ない。

「そうですよ。何もできない無力感に日々苛まれ、無為に年月を過ごすのは辛いことです。やめておいた方が無難です」

赤い麒麟も同調する。

にこやかな笑顔を恨めしげに見て、十座は覚悟を決めたように顔を上げた。

「何もできないかどうかなんて、やってみなければわからないですよ」

なまじ整った容貌だけに、有無を言わせぬ迫力がある。
十座はきっぱり言つと、梃子でも動かぬ顔で麒麟と娘をねめつ
た。

「俺はここに残る」

司馬省

「時にあなたは司馬家の方ですか」

赤の麒麟は十座から離れてそのまま床にだらしなく寝そべると、おもむろに聞いた。

「・・・しかし、伝説の神獣がこんなだとは・・・ぬかった」

「何かおっしゃいました？」

「・・・いえ、別に」

そう誤魔化すと、十座は何事もなかったような顔で名乗るのが遅れた非礼を詫びると、つとめて丁寧に答えた。

「よくお分かりですね。確かに私は司馬家の人間。名を十座と申します」

「へえ、十座、世界のすべてですか。これはまた大層立派なお名前だ」

座とは、すなわち国を表す。最上の数とされる十を冠とし、十座とはこの世のすべてを意味した。十座に坐す、といえば富と権力を欲しいままにするという意味の慣用句でもある。

「それほどのことはありません」

なのになぜか苦々しげに十座は言った。

「いや、別にあなたを褒めたわけじゃありませんよ。世界のすべてなんて、そんなご立派な人間には見えませんかね。名前負けもい

いところです」

「まあ、おっしゃる通りだ」

ひどい言われようだったが、十座は怒るところかむしろ楽しげだった。

「この人間は、その司馬とかいうのの誰かと似てるの？」

真白が聞く。十座に押し切られたことがよほど不本意だったらく、若干言葉にとげがある。

「ええ。司馬の人間は、これまでも何人が来ているんです。彼らからは等しく同じ海の匂いがする。ですから、なんとなく分かるんですよ。特に、十座は最初の司馬によく似ていますし」

「最初の司馬？・・・それは、もしかして司馬省ですか」

「ええ、そうです。その司馬省に似ているのですよ、あなたは」

なにがそれほど嬉しいのか。炎駒は膝を叩いて笑み崩れた。

司馬省は稀代の剣豪にして当代一の術者なり、と国史にも記される。

騒乱の最中であつた応の国を立て直した救国の英雄でもある司馬省は、名門司馬家の開祖にして今に至るまで脈々と続く大司馬の家の礎を築いた人物でもあつた。

省が麒麟の門を訪れたのは、二十をいくつか過ぎたあたりだったというから、十座とそれほど変わらない年頃であつた。まだ若き司

馬の祖は、一人龍と対峙し龍爪を受けられている。

龍の爪は、人に手渡された瞬間に一振りの刀に姿を変える。

その名を龍爪刀。

世界にただ一振りの、龍に認められたものだけが使うことを許される伝説の宝刀は、司馬省の死とともに、跡形もなく消えた。司馬家の歴史は伝えている。

「私が開祖に似ていると言われるか・・・それはまた、皮肉な」

十座は深く自嘲する。その横顔に透ける苦痛と悲しみ。生きることに絶望し、病みつかれたような青い顔。十座はまるで泣いているように見えた。

「・・・一族の誉れなんじゃないの、その司馬省とかいう人は。そいつに似てるなら良いことじゃない。なのに、なぜそんな辛気臭い顔をするの。ここは素直に喜ぶところでしょう。ホントにひねくれ者だね、あなた」

これ以上何を言うつもりもなかったのに、真白はついつい悪態をつく。この傲岸不遜な男の萎れた顔を、どうしてか見たくなかったのだ。

「ひねくれ者か。まあ、確かにその通りだが・・・俺は司馬家を追われた人間でね。それが偉大なる開祖に似ているなど、司馬の誰が聞いても憤懣ものだろう。素直に喜べるようなことではないさ」

「ま、確かに似ているのはどこからどう見ても顔だけのようですね。省も綺麗な人間でしたから。でも、どうやら中身はまるきり似てい

ないようです。省は、もう本当にとてもオモシロイ子でしたからね。あなたのように寄らば斬るぞという雰囲気はこれっぽっちもありませんでしたし、とてもとても優しくかった」

炎駒は笑う。過去を辿るようにひどく懐かしげな目をした。

「優しい？司馬省が？」

対して十座は怪訝な顔だ。

「はい、優しくったですよ。省の中には、仁のすべてがありました」

仁とは慈しむ心。他者へ深い思いやり。

赤い麒麟は何を思い出したのか、不意に面白くてならぬという顔をした。

「省は、それは綺麗で泣き虫で、それで人が好きで妖が好きで獣が好きで。剣の腕は十座同様大したものでしたけれど、気が優しくて何一つ傷つけられないような、そんな人間でしたよ」

「それは・・・失礼ですが、人違いではありませんか。司馬省は、目的のためならどのような残酷な手段も辞さない冷酷な男だったはずです。実際、国を守るためとはいえ、人も妖も五万と斬り捨てている。人に言えないような汚いことも相当やったと聞いています。司馬省の二つ名は人斬り。どれほど殺したか数え切れない、それこそ語り草になるほどに殺しつくした男です」

「同じ司馬のあなたが言うのですから、たぶんそうなのでしょう。でも、殺すことも何もかも、そうしなければならぬ事情があったのだと思いますよ、私は」

殺生とは無縁の獣は、別段驚く風もなく笑うとあっさり言った。

あれは邪な者に扱えるような刀ではないのです、と。

そうして、十座の顔を何とも言えない眼差しでじっと見つめた。凝視に耐えかねた十座が目を逸らす、その瞬間まで。

「十座、あなたには知っておいてほしいです。本当の省がそういう人間だったということを。襲ってきた妖を勢いで斬り捨てて、何度も何度も謝りながら泣くような。底抜けに優しく根っから不器用で、そして大切なものを守るために自分が傷つくことを恐れないう心強い人でした。人斬りなどと言われて、省はどれだけ辛かったです。きっと誰も居ない所でたくさん泣いたのでしょうかね」

かわいそうに。

慈悲の生きものは、そう言ってぽろりと綺麗な涙を流した。

惑う夜

天空高く飛ぶあの長き尾は、あれは妖であろうか。

洞穴近くの崖に座り、十座は一人空を見上げていた。月明かりが眩しいほどの夜だった。その月の光を受けてなお、満天降るような星空。

十座は深いため息をついた。

何年かかっても手伝うとは言ってみたものの、どうすればいいのが皆目見当もつかない。気ばかりが焦る。ごろりと横たわると、目の前にはただ星しか見えなかった。見つめていると、体ごと星空に溶けてしまいそうになるほどの深い闇。

「いつそ溶けてしまえ」

十座は呟いて、もう一度ため息をついた。

唐突に、視界の隅に白い何かが翻る。妖かと思ったそれは、よく見れば人の姿をしていた。

「綺麗でしょう」

人一人分の間を空けて隣に座った白髪の娘、真白が言った。

「真上で一番輝いている星が龍の目。そして、四方にあるのが四神」

東方青竜に北方玄武。西方白虎にあちらが南方朱雀。

一つ一つ指をさす。その度に揺れる白い髪が、月明かりに照らされキラキラと光りの輪を描いた。黒だとばかり思っていた瞳が、実は海の底のような黒藍なのだと気づいた十座は、理由の分からない胸の高鳴りに困惑を隠せない。

綺麗だと、どうしてかそう思ったのだ。

顔形が、というわけではない。単なる美醜でいうのなら、十座自身の方が真白より数倍整っている。それ以前に、十座に他人の容姿に対する興味なんてものは皆無なのだ。基本的にどうでもいいと思っているし、見るに耐えないほどでなければいい程度の認識しかない。自分の外見にも周囲が呆れるほど無頓着な男なのである。当然、他人の顔に心惹かれたことなど一度もなかった。

なのに。

剣先を向けられてなお凜と立つ真白も、そして無邪気な微笑を浮かべる今の真白も。

「綺麗だな・・・」

などとうつつかり口を滑らせた十座の内心の動揺に気づくことなく、真白は無邪気な笑顔を向ける。

「うん、綺麗だよな、今日の夜空。星も月も、それから森も」

にこにこ笑う屈託のない顔が、これほど心臓に悪いとは思わなかった。十座はさりげなく視線を逸らすと、強引に話を星空から

真白の笑顔から 引き剥がしにかかる。

「あー……。それで結局お前はどっちなんだ。人なのか妖なのか。角がないところをみると麒麟ではないようだが」

「なにさ、いきなりやぶから棒に……。人だよ、私は。悪い？
なんか文句でもある？」

途端に不機嫌になった真白は、いかにも不承不承という顔で横を向いてしまう。

「文句などはない。だが……。嫌そうだな」

「嫌そう？違うよ、嫌そうじゃなく嫌なの。私は人が嫌いだから」

「だが、お前は人間なんだろう。なら、なぜそう嫌う」

「それは……。あなたには関係ないよ。放つとして」

突き放すような言葉が傷つけたのは、十座ではない。

「そうか、分かった」

そ知らぬ顔で答えて、十座は夜空に目を向ける。傷ついた黒藍の瞳を見たくなかった。見れば、十座の中の何かが揺れる。だから気づかない振りをして、十座は雲一つない夜空を見上げた。そういえば、こんなにゆっくり星を見たのは何年ぶりだろうと半ば強引に考えてみる。

静かな夜だった。

深い森のあちこちから、夜生きる獣や妖の気配はするけれど、人の営みは感じられない。

ここは、人の生きる場所にあらず。その思いが急速に胸に迫る。

十座は思わず隣に座る少女の横顔を見るともなしに見た。意志の強そうなその瞳は星のようだ。凜として潔く、そしてどうしようもなく孤独な一つ星。

麒麟はほとんど門を離れることはないという。ならばこの娘は、こんな場所にたった一人で、そしてこれからもずっと一人でいるのだろうか。

「寂しくないのか」

口にしてまた愕然とする。さつきから自分は本当にどうかしている。気が触れたとしか思えないような台詞ばかりが勝手に口をつく現状に、十座は思わず唇を噛んだ。

そんな十座に気づいたのだろうか。真白はわずかに目を見張り、「らしくないね」と少し笑った。

「一人じゃないから寂しくないよ。妖たちは沢山いるし、麒麟だっている。山には龍もいるんだよ。私は人が嫌いだから、人がいないのはむしろありがたいくらいだし。・・・寂しいわけないよ」

そう言う顔がやけに寂しそうだ。

更に言いかけて、十座は今度ばかりはしっかりと口と嚙んだ。仔細があるのはお互い様。これ以上深入りして、得られるものなどあるはずがないのだから。

穢れた手

スイと目の前をゆき過ぎた流れ星は、綺麗な放物線を描いて向かいの山の頂に消えた。隣に座る白い髪の花が指さして歓声を上げる。十座を前に怯むことも臆することも無い花は、笑顔で天を仰いでいる。

つくづく不思議な花だと思う。

どうみても十七、八の頼りない風情の小花なのに、十座に刀を向けられても平然として怯える素振りも見せなかった。大の男でも、あそこまでの平常心は中々保てるものではない。なにより、その刃を向けた人間を前にして、咎めるでもなく厭うでもなく今も普通に接している。それだけではない。花はそんな十座に居場所を提供さえしたのだ。

なぜそんなことができるのか、十座にはどうしてもわからない。分からないといえば、人が嫌いだといいながら人である自分を助けたのも理解できない。そういえば、まだ助けてもらった礼すら言っていないことを思い出して、十座は柄にもなく後ろめたい気持ちになった。

「その・・・さっきはすまん。・・・寂しくないとか、立ち入ったことを聞いた」

必要以上に素気ない口調になったのは、どうにも居たたまれなかったからだ。

「別にいいよ、そんなの。それより、そういうあなたは寂しくないの。とんでもない妖嫌いだし、人だってそれほど好きなようには見

えない。家を追い出されたのも、その心底ねじくれ曲がった性格のせいだとすれば友達だつていないだろうし」

「お前……人が下手に出れば言いたい放題言いやがって」

「言われるようなことをしたのは、どこのどいつよ」

「……まあ、否定はしないが」

そう言つてつい笑つて、十座は不意に押し黙った。

「あなた今、笑つたこと後悔したよね」

抱えた膝に頬を寄せて、真白はしてやっつたりの表情になる。初めて見た十座の笑顔に自然と頬が緩む。月明かりに浮かび上がる端正な横顔は幻想的で、まるで人ならざるもののように。それを聞いたら十座はさぞ嫌がるだろうが。見えたのだ。

「俺は笑つてなどいない。従つて後悔もしていない」

案の定、無然とした顔で十座が言う。相当に不本意なのだろう。眉間の皺が一際深い。

「誤魔化しても無駄、無駄。私は妖並に夜目が利くんだからね」

「だからなんだ。笑つてないと言つたら笑つてない」

「嘘。笑つてたよ、ちゃんと」

断言したら睨まれた。それでも少しも嫌な気分にならなかったの
で、真白は寝ころんだ十座の顔を真上から覗き込んでみた。仏頂面の十座がキツイ目で睨みつけてくるが気にしない。

「……なんだ。俺の顔に何かついててもいるのか」

「ん？特に変わったものはついてないと思うよ。目と鼻と口と。あ、

あなた、右目の端に黒子があるんだ」

「・・・だから、それがどうした。お前は一体何がしたいと
「十座は綺麗だね」

唐突に。

白い娘はふわりと笑う。それはまるで、柔らかい月の光が揺れる
ようで。

飾り気なんて欠片もない心からの笑顔。無邪気で素直で、少なくとも
ともここ数年間、十座には間違っても向けられたことのない種類の
微笑みだった。

言葉を失う十座に、真白は知らず追い討ちをかける。

「あなたはもつと笑うといいよ。出し惜しみはよくない。もつたい
ない。あなた、性格はともかく顔だけはすごく綺麗なんだから、そ
れを利用しない手はないよ」

真剣に真白は頷く。十座が凄まじく嫌な顔をした。

「何を言いだすかと思えばつまらんことを。顔の美醜なんぞで得を
するのは女だけだ。大体、綺麗と言われて喜ぶ男がどこにいる。俺
が欲しいのは力であって他人の好意などいらん。馬鹿な事を言うな」
「どこが馬鹿なことなのさ。今のあなたの笑顔は本当にすごく綺麗
だったよ。そういうのも力だと思う。ねえ、試しにもう一度笑って
見せてくれないかな」

言われた言葉に、十座は一瞬身を硬くして
次いで弾かれた
ように身を起こした。

「だ、誰が見せるかッ！くだらんことを言うな！俺の欲しいのは力
だ。それ以外はいらんと言ったらいらん！」

十座は肩で息をすると頭を抱えた。この娘と一緒にいると激しく調子が狂う。十座は眉間にしわを寄せた。

「また、そんな顔して。・・・あなたはもう十分強いだろ。それ以上強くなってどうする気なの。世界一の称号でも欲しい？それとも、司馬省みたいに人斬りと呼ばれたいの」

「かまわない。いや」

もうすでに呼ばれているかもな、と十座は唇を歪めた。

「呼ばれてるって。・・・あなた、そんなに人を斬ったの？」

「斬った」

嘘をつく気はもう失せた。澄み切った黒藍の瞳を前にして、小手先の偽りがなんになるう。怒る時も笑う時も、真白はいつそ気持ちいいくらいいまっすぐだ。十座は胸の奥から湧き上がる何かを無言で押し戻した。真白は綺麗すぎる。一緒にいると、薄汚い自分に耐えられなくなるくらいに。

馬鹿馬鹿しい。何を今更。

十座は穢れた自分の両手を見つめる。今さらどうしようが何も変わらない。救いなどない。そんなこととうの昔に分かっている。だから。

「聞きたければそう言え。聞かせてやる」

言ったのは自分だが、真白が頷けば十座はすぐに目をそらした。目の前に広がる樹海は、まるで夜の海だ。深い深い海の底は、真

白の瞳と同じ黒藍の色に染まっている。風にそよぐ木々のざわめきは、あれはまるでさざ波のよう。

ため息を押し殺し、十座は重い口を開く。

運命の日

青海に面した応の国、澄明の港は、その日も変わらず賑わっていた。国下一の港には、大小の商船漁船が入れ替わり立ち替わり常に混雑している。

ここは澄明市、宣。

宣は司馬家開祖、司馬省が開いた商業の街だ。東西の交通の要として発展し続け、今も変わらず人や物そしてそれ以外のすべてが集まる一大拠点となっている。

人はこの地を、全世と呼んだ。

宣になきものなし。世のすべてがここにある、と。

「おい、十座！」

大声で呼ばれて、十座は不機嫌も露わに立ち止まった。

渋々振り返り、人垣から優に頭二つ分は大きい男が両手を振りまわしながらやってくるのを、仏頂面で出迎えてやる。

「地央、俺は何度も言っただぞ。往来でそんな大声を出すな！」
「あー、すまん、すまん。だが、気にしなけりやどつという事もなかろう」

司馬と並び称される宣の名門、円家の二男坊は、気にした風もなく十座の隣に肩を並べた。

「俺は気にする」

「おいおい、天下の司馬の総領がそんな胆の小さいことでどうする。」

お前も俺様のように、こうしてどんと構えておればいいんだ。そうすりゃ何事も気にならなくなるぞ。いい機会だ。お前、この俺を見習え。そして敬え」

「だから、なぜ俺がお前なんぞを敬わねばなんのだ。お前こそ俺を見習え。地央、お前は少し周りを気にした方がいい」

「冗談じゃねえ。俺はお前と違っていつまでも瑣末なことには拘らん懷の大きい男なんだよ。第一、周りの目など一々気にしていたら、船乗りはつとまらんぞ」

「生憎、俺は船乗りじゃない」

「全く嘆かわしい。宣一の船主のくせに船に乗らんとは」

もったいないことだと大声で言っ、地央は日焼けした顔をくしゃくしゃにして、また笑った。

穏やかで聡明な司馬の次期当主と豪放で行動力のある円の次男。性格も何もかも正反対に見える二人は、幼い頃からの親友同士だった。

宣の次代を担うに相応しいと誰もが認めた二人の未来は、眼前に広がる青い海原のように洋々たるものであるはずだった。

その日その瞬間までは。

運命の齒車は音もなく回りだす。

この時、司馬十座二十歳。円地央二十一歳。
空は青く、海もまた青かった。

港についた二人を待っていたのは、思いもかけぬ知らせ
報だった。 訃

「父上が亡くなられただと！まさか！」

日頃の冷静さをかなぐり捨てて、十座は叫び声を上げた。怯えき
った伝令の男の胸倉を掴んで、勢いよく壁に押し付け詰め寄る。

「今さつき屋敷で話したばかりなんだぞ。つまらん嘘を吐くな！」

「お、おい、落ち着け十座。まず手を放せ。それでは話も満足に聞
けん」

地央が強引に割って入る。

「う、嘘ではありません。しよ、頌景様は……つい先ほど……な、
何者かに斬りつけられて……」

亡くなられたのです、と男はつかえつかえ言った。

司馬家現当主、司馬頌景の横死。すべての悲劇はそこから始まっ
たのだ。

裏切り者（前書き）

文中に、若干の暴力表現がございます。
苦手な方はお気をつけ下さい。

裏切り者

ソレが現れたのは、それからすぐのことだった。

初めに気づいたのは地央。

司馬家の屋敷の門前に、突然巨大な噴煙があがった。同時に、屋敷内の庭園からすさまじい轟音と人々の悲鳴が鳴り響く。

「なんだ……ありゃ」

呆然と呟いて、地央は大きく目を見張る。

「窮奇^{きゆうき}?！」

土煙りの先に見えるのは虎に似た巨大な影。

妖だ。

前足には鳥のような翼を生やし全身から怒りの気配を迸らせて、窮奇は手当たり次第に人へ物へと襲いかかった。バリバリと恐ろしい音を立て、窮奇は捕まえた人を頭から飲み込んでいく。

瞬く間に満ちる血の匂い。広がり続ける血の海に浮かぶのは、かつては人であった物の一部。引き裂かれ、無残にもがれた人の四肢であつた。そこかしこから聞こえる断末魔の絶叫は止む気配すらない。

まさに地獄絵図。

「なんで……なんで窮奇がこんなところに！」

茫然と立ちすくむ十座を尻目に、窮奇はふわりと舞い上がり、あつという間に屋敷の近くまで迫る。気づいたときには、獣は十座が

居る窓の下までやってきていた。

「くそっ！十座！お前なに呆けてる。死にたいのか、バカ野郎！」

地央の怒声に我にかえって、十座はどうにか走り出す。夢中で屋敷を離れ、喉が張り裂けんばかりの大声で叫んだ。

「妖だ。妖がでたぞ。皆逃げろ！」

怒号と悲鳴が飛び交う中、司馬の屋敷は阿鼻叫喚の巷と化していた。

司馬の屋敷は崩壊した。

どこからともなく溢れ出る幾多の妖。飛ぶモノ、這うモノ。この世のものとは思えない光景。

地獄。

「皆死んだ」

一番下の妹は、まだ十にもなっていなかったというのに。

十座の目の前で、あどけない顔は無残に引き裂かれ、小さな手は血にまみれた。助けることはおろか目を閉じることでもできず、十座はただ呆然と妹が息絶えるのを見ていることしかできなかったのだ。

「そんな・・・」

真白は喘ぎ、ぎゅっと強く胸を押さえた。深い悲しみと喪失感。

十座の苦しみは今もまだ痛いほどで、息をするのも苦しかった。

「そんなのあり得ないよ。窮奇が……人里に出るなんて」

窮奇は四凶と呼ばれる大妖の一角。

深山の奥に住み、容易に人前に現れることはない。これほどの妖が突然に、それも宣などという都会に現れるはずがないのだ。

誰かに呼ばれでもしない限りは。

「まさか……」

「そのまさかだ。召喚した者がいたんだ」

真白が目を見張る。

宣に現れたのは窮奇だけではない。大量の、それこそ地を埋め尽くさんばかりの妖の群だったという。人間にそれほど大量の妖を召喚する術などない。ないはずだ。

「一体誰が……どうやって」

「召喚したのは、俺の父方の叔父。司馬連准。おそらくは、司馬省の残した禁呪を使ったんだろう」

稀代の術者でもあった司馬省は、死後多くの呪術書を残している。中でも危険な呪術は、開祖自ら屋敷の地下深くに封印し禁呪としていた。十座の叔父の連准は、その禁を犯して妖を召喚したのだ。

「その場で俺は捕らえられた」

「そんな、なんで！犯人はその連准って人じゃないの」

「連准は頭のいい男だ。あの男からすれば、馬鹿な甥一人追い込むくらい造作もないさ。計画も証拠も完璧だった。俺の有罪を示す痕跡は、それこそ数えきれぬくらい用意されていたんだ」

見事なものだったよと皮肉気に唇を歪める様が、真白にはただただ哀しく辛い。

十座は、司馬家当主とその家族及び多くの市民を殺した罪で、地下深く投獄された。

友

十座をそこから救い出したのは、巨体の船乗り。円地央だった。円家の敷地内にある古井戸は、底にいくつも横穴があって四方につながる通路になっている。

「この井戸を掘ったのが円継。つまり俺のひいひいじいさんってわけだ」

風のように現れるや有無を言わず十座を牢から掻つ攫った男は、変わりモンだがすごいだろうと胸を張った。縄で拘束されたままの十座を軽々と肩に担ぎあげ、地央はするすると井戸を下りる。そのまま横穴を抜け、長い通路を走り出した。

「このままいけば町はずれの森までいける。簾丈あたりまで行けば外海に出る船に乗れるだろう」

「おい、離せ、地央。なんでこんなことするんだ！」

やっと緩んだ口枷の隙間から十座が怒鳴った。命などもうどうでもよかったのに、「どうして」と唇を震わせる。

たとえばどこに逃げようと、その先にはなにもないのに なぜ助ける。

大切な人は皆死んでしまった。闇雲に差し出した手は何一つ救えず、命はまるで砂のように指の間から零れ落ちて消えた。

連准は十座が子供の頃から慕った男だった。

物静かで賢い連准叔父は、いつも十座に色々な知識を教え導いてくれる教師でもあったのだ。信じていた連准の裏切りは大きな傷となり、十座は生きる意志そのものを見失った。

絶望は時に人の心を殺す。

刃物が傷つけるよりも深い、直ることのない傷は徐々に徐々に十座の心を蝕んでいき　　そうしてこのまま死んでしまうつもりでいたのに。なぜ。

「なぜだと？馬鹿か、お前は。ダチ助けるのに理由なんぞいるか！」

なのにこの男は、呵呵と笑ってそう言うのだ。

「馬鹿はお前だ、地央。俺は人殺しなんだぞ！お前の友なんかじゃない。人殺しに友なんかいない！」

「お前は誰も殺しちやいないだろうが！」

死に物狂いで暴れても、海の男は小揺るぎもしない。地央は大声で怒鳴り返すと、動くんじゃねえよと言って笑った。

「大人しくしてろ、十座。落つことされてえのか」

「ふざけるな、地央！いいから早く俺を放せ！やったのは俺なんだ。牢に戻せ！」

十座を助けたと分かれば、地央もきつと殺される。これ以上、大切な人を失うなんて耐えられない。そんな十座の必死の抵抗も空しく、地央の背中にはビクともしない。

「下手糞な嘘だな、おい、十座。お前がどんなヤツかなんぞ、この俺様が一番よく知ってたんだ。一体、何年の付き合いだと思ってやがる。お前のことだ、大方そのまま黙って大人しく死ぬつもりなんだろうが、そんなことさせるか。言っとくが、俺がこうするのはお前のためなんかじゃねえからな。そこんとこ履き違えるなよ。これは

俺のけじめだ。お前が考えてるような終わり方じゃ俺が嫌なんだよ。お前がどうしたいかなんぞ俺の知ったことか。んなこたあ俺には関係ねえんだよ。お前は俺の大事なダチで、助けたいから助ける。それだけのことだ」

地央の言葉はいつもの通り呆れるくらい単純で迷いが無い。若い船乗りはそう言うのと、またカラカラと笑った。十座は絶望に駆られて唇を噛みしめる。長い付き合いなのはお互い様で。

こうなった時の地央を止められる者はいない。いつだって地央は、自分のやりたいようにやる男だから。

ボロボロと涙を流しながら、それでも十座は懇願した。

「頼む、地央。頼むから俺を置いて行ってくれ。こんなことがバレたら、お前だってタダでは済まないんだぞ！間違ひなく首が飛ぶ！俺はお前が死ぬのは嫌だ！これ以上、俺は何も失いたくない！」

「失いたくないや失わなきゃいいだけの話じゃねえか。泣くな、バカ野郎。仮にも宣の男が情けねえ声出すんじゃないよ」

ここを曲がればすぐに出口だと言って笑った顔が、十座が友を見た最後になった。

爆音とともに吹っ飛ばされ、十座はしばらく気絶していたらしい。濃密な妖の気配に身を起こし、解けた縄を振り棄てる。足元に転がっていた地央のものらしい大刀を拾い上げ、十座は砂塵の中に声をかけた。

「地央、大丈夫か？」

返事はない。

途端に開けた視界の先に、転がるモノ。

目の前に横たわる大きな背中には、首が、なかった。

涙のわけ 1

その後のことを、十座はほとんど覚えていない。

獣のような咆哮をあげて、向かってくるものはすべて斬り捨てた。妖もいたし人もいた。尋常でない数だったはずだが、そのすべてを殺しつくして十座は走り続けた。

斬りながら走り、走りながら斬った。

それからまる二年が経った。

龍に会い、龍爪刀を手にいれ、連准を斬る。そして、すべてを終わらせる。

十座の願いはただそれだけだった。生き残るつもりも、生きながらえる気もはやなく。

死ぬために、ただ生きてきた。

「俺が妖を憎むのは、家族や友を殺されたからじゃない。自分と似ているからだ。俺は大勢の人の命を踏み台にして生き延びてきた。なんと浅ましくおぞましい命だと思わないか。こうして俺が息をするだけで、美しいものは穢され尊いものは失われる。こんな醜いモノを人と呼んでいいわけがない。地央が死んだとき、俺の中の人も一緒に死んだ。今の俺は妖同然、いや妖以下の化け物だ」

喜びも楽しみも、悲しいと思う心すら失った。ただ深い憎悪だけを握りしめて、十座は今まで抜け殻のような生を生きてきたのだ。

「・・・あなたは本当に」

呟きはかすかに震えを帯びて途切れた。

馬鹿だよ、人間。

声なき声は優しく、そしてどうしようもなく哀しい。

「何を・・・」

と言いかけた十座が見たものは、悲しみと、そしてそれを大きく凌駕する怒りに満ちた黒藍の瞳。キツとまなじりを吊り上げた真白に睨みつけられ、十座は思わず息を呑む。

「お前、一体何を怒って」

「何で私が怒ってるか分からない？だからあなたは馬鹿だって言ったの！聞こえなかった？なら何度でも言ってあげるよ、この馬鹿！」

威勢のいい啖呵と同時に、バチンと頬に衝撃が走る。聞き返す間もあらばこそ、気が付けば十座は力いっぱい横面を張り飛ばされていた。

「だからどうして殴」

「どうしてじゃない！あなたがあんまり馬鹿だから、目を覚まさせてやっただけ！感謝して！」

「お前なあ・・・」

呆れて口を開いたが、しかし十座は結局眉をひそめただけで黙っ

てしまった。馬鹿と罵られ殴られて。それでも少しも怒りが沸いてこないのが不思議だった。僅かでも齒向かうものは全て、老若男女区別なく斬り捨ててきた自分が、こんな小娘相手に逆らうことなく諾々とされるがままになっっている。そう考えると可笑しかった。

強気な言葉とは裏腹の泣き出しそうな顔、振り上げた掌も心配になるくらい細く華奢で。十座が少しでも抗ったら逆に壊してしまいそうで怖くなる。

「……何で殴られた俺よりお前のほうが痛そうなんだ」

おかしなヤツだ。

そんな十座の呟きを無視し、白い髪をゆらして、真白は容赦なく腕を振り上げ、今度は拳で十座の胸を叩き始める。

「痛い……」

「当たり前でしょ、痛くなるように殴ったんだから！この馬鹿！」

怒りに体を震わせて、ほのかに蒸気する頬を十座は驚いた顔で見上げた。

「……いや、だからなぜお前が泣く」

「知らないよ、そんなの！あなたが泣きたくなくなるくらい馬鹿だからじゃないの！」

焦れたように十座の両肩を掴んで、真白はもう一度馬鹿となじった。大粒の涙が頬を伝って、ポタポタと十座の胸元に落ちる。暖かい雫はじわりじわりと冷え切った男の胸を侵食する。

まるで陽だまりにいるようだ。

十座は心の中で呟くと、戸惑いを隠すように目を伏せた。
無理やり浮かべた微笑は、ただひたすらに苦かった。

涙のわけ 2

「お前、・・・人のことだと思つて無茶苦茶言つな。まあ、確かに俺は馬鹿だが」

「なんでそう簡単に認めるの！そういうのが馬鹿だつて言ってるのよ！」

その全てを諦めたような顔が気に食わない。真白は更に憤る。くしゃりと顔を歪めると、真白は俯いて唇を噛んだ。この男は勝手に一人で死のうとしている。どれほど沢山の思いをかけられて生きてきたのか、気づくこともないままに。

「あなたを助けたその地央つて人は、踏み台にされたなんて思つてないよ。化け物命がけで守る馬鹿がどこにいる？あなたは妖でも化け物でもない。人だよ。切れば血が出るし、嬉しければ笑うし、悲しければ泣く人間なの。自分で自分を貶めるのはやめなよ。それが命がけで助けてくれた友だちを踏みにじることだつて、なんで気付かないの！」

「お前になにがわかるんだ。何も知らないくせに、知った風な口をきくな！」

無性に腹が立つて十座は怒鳴り返した。

今まで誰に何を言われても何も感じなかった心が、軋みを上げて揺れている。真白の言葉は十座の胸をかき乱した。もうとうに死んだはずの暖かい心を。強く。

「うるさい！あなたみたい馬鹿の言うことなんか知るわけない。勝手に悲劇の主人公気取つて、大事にしてくれた人の気持ちも分かるうとしらない馬鹿やろうのことなんか知るか！」

「なんだと」

「あなたを助けて死んだ人間は、復讐してほしって言った？恨みをはらして欲しいってあなたに頼んだの？そんなはずない。その人はね、ただあなたに生きていてほしかったんだよ。そのために、大事な自分の命までかけた。あなたが大切な友達だったから！」

地央の人生は地央だけのもの。十座の人生が十座だけのものであるように。

運命もまた同じ。

あなたは他人の運命まで背負う気なのと真白は叫んだ。復讐するということは、そういうことだと。

「死んだ奴の分までなんて生きられないし、そんな必要どこにもない。大切なのは、助けられたその命が尽きるまで自分の分を生きることだけだよ」

「分かった風な口をきくな！地央は俺のせいで死んだんだぞ！」

「でも、それを選んだのはその人だよ！」

残酷な言葉を、しかし真白は躊躇なく口にした。

「自分の命とあなたの命、それを両方天秤にかけて、あなたを選んだんだよ、その地央っていう人は。あなたに自分の命を賭けるだけの価値があると信じて、自分の意思でやったんだよ。自分の命を惜しまない者なんかいない。悩まなかったはずも、怖くなかったはずもないのに、そこまでして残した命を簡単に捨てようとするのが馬鹿じゃなくてなんなのさ！あなたの命は、簡単に投げ捨てていいよ。うな命じゃないよ！」

大声で怒鳴ると真白は大きく腕を広げた。そのまま、呆然としている十座を強く抱きしめる。

「ほら、聞こえる」

心臓の鼓動が。トクトクと力強く動くその音が。獣だろうが妖だろうが人だろうが。生あるものの、それは確かな命の鼓動だ。

十座はハッと息を呑み、怯えたように体を強張らせた。この腕の温かさは危険だ。うっかり身をゆだねれば最後、自分の中の何かが変わる。決して忘れないはずの、否忘れてはいけないものを失ってしまう。そんな恐ろしい予感がした。

「その人は死んでしまったけど、あなたはまだ生きている」

きつぱりと真白は言った。それは、まるで自分自身に言い聞かせるようでもあり、ここにはいない誰かに宣言するかのようでもあった。

「助けられたあなたには、生き続ける義務がある。大切に幸せに生きる義務があるんだよ。復讐のためにドブに捨てるくらいなら、死ぬ気で生きてみたらどうなのさ。その方がよほどその人の為になる。粗末になんてしたら、私がそいつの代わりにあなたをぶっ飛ばしてやる!」

「・・・そう言うことはぶっ飛ばす前に言えよ。全く・・・お前は何でそんな風に・・・」

あいつと同じように言うんだ。

呟いたと同時に頬が温かくなった。自分が泣いていることに気付いて、十座は言葉を失った。二年前のあの時から、どれほど辛くて

も流れることのなかった涙が今、頬を伝う。

頭が真っ白になって押し黙れば、聞こえてくるのは互いの心臓の音だけで。

白いうなじの先には満天の星空。

真白の体温がじんわり伝わって、その温かさに十座はますます混乱した。

「・・・馬鹿はどっちだ。なぜ俺なんかのために、お前がそんなに泣かなきゃならない」

なぜ真白は泣いているのだろう。

なぜ自分は泣いているのだろう。

問いの答えは夜の闇に紛れ、探す手立てを持たない男はひたすらに途方に暮れる。迷子のように。

ため息は重く深く。

脳裏に浮かぶのは、今はなき海の男の笑顔。黙って死ぬなど言いなから一人でさっさと旅立ってしまった、あの忌々しいほど真っすぐな大きな男の、大らかで明るい笑顔だ。

そう言えば、あいつはどんな時でも笑っていた。追い詰められ後のない状況でも、常に前を向き希望を失わなかった強く逞しい、海の
宣の男。

泣くな、十座。宣の男が涙なんぞ見せるな、馬鹿やろうが。

目を細め広い肩を揺らし、頭の中の地央はいつだって笑っている。
あいつは今の自分を見てなんと思うだろう。十座はそれが無性に
気にかかった。

啼く麒麟

「眠れませんか」

突然話しかけられて、十座は小さくため息をついた。

横になっても一向に眠気はやってこなかった。仕方なくこっそり起きだして、十座は一人、月明かりの元で刀の手入れをしていたのだ。振り払っても振り払っても、真白の泣き顔が頭から離れない。離れて、くれない。

「気配を消して近づくのは止めてもらえませんか。・・・斬りますよ」

「真顔で怖いことをおっしゃる。冗談にしても笑えません」

「俺は冗談は言いません。それにこれは地顔です」

「やれやれ、ご機嫌斜めですね。取り付く島もない」

そう言いながら近付いてきたのは、赤毛の麒麟。炎駒だ。少し離れた場所で歩を止めると、しゃがみこんで足を投げ出した。

「・・・まだ、匂いますか」

この麒麟が十座に近づいたのは初めだけだ。友好的な雰囲気になつてからは、決して手の届くところにはやってこない。十座の体に染み付いた血の穢れは、少しばかり身を清めたくらいでは容易に消えはしないのだろう。

「ああ、やはりお気づきになりましたか。んー、先ほどは咄嗟に触ってしまいました、殺生の血は私には少々きついのですよ。気を悪くされたら申し訳ないですが、こればかりはどうしようもありま

せん」

「いえ、それは・・・あなたが謝るようなことではなく俺のせい
です。ですがご安心を。もう当分殺生はしません」

「ほう、それはまたずいぶんと殊勝な事をおっしゃる」

炎駒は笑う。

「俺も門を通りたいですから」

「でしょうねえ。私としても、いくらなんでもここまで血で穢れた
人を通すわけには参りませんから」

「ええ。ですからご心配には及びません。少なくともここにいる間
は、もう何も傷つけません」

「妖も？」

「ええ、妖も」

「そうですか。それは良かった」

炎駒は言うつ、何よりですねえと相好を崩した。屈託のない笑顔
だった。

「それより十座、あなたさっきまで真白と一緒に居たでしょう。仲
良く何を話していたのですか」

「・・・・・・・・・・や・・・・・・・・・・それは、別になにも」

痛いところを突かれて、十座はとっさに口ごもった。視線を泳が
せつつ、もごもごと言いつめいた繰言を口にする。聖なる獣はそれ
を眺めてニヤリと笑った。

「なーにが「それは別に」なんですか、この色男。顔赤いですよ、
十座」

「あ、赤くなど」

ないと言いかけ、十座は小さく舌を打った。目の前には楽しげに揺れる赤い眼。からかわれたことに気付いても、相手が麒麟では怒るに怒れない。

「・・・なにを想像されているかは分かりませんが、本当に何もないですから。それに麒麟の想い人に手を出して、これ以上恨みを買いたくない」

「私は元から十座のことを恨んでやしませんよ。それに、真白のことは心から好きですが、人が麒麟の伴侶になることはありません。残念ですが」

どうです安心しましたか。そう言って炎駒は笑う。

「なんで俺が！その・・・あの娘とは、昔の・・・昔話をしていただけで、別に大した話をしたわけじゃありません」

逸らした頬が仄かに赤い。稀なる霊獣は横を向いてしまった十座を楽しそうに見て、

「暗い中で二人きり。若い男が何もなかったなんて、ちょっと信じられませんね。手ぐらいは」

「握ってません！」

「なら口づけ」

「してません！」

「なにむきになってるんですか。なんか却ってあやしいんですけど」

炎駒は嘖き出すと、のけ反ってケラケラと子どものように笑った。十座がげっそりと疲れた顔をする。

「ねえ十座。真白はいい子でしょう。あの真つすぐな瞳に見つめられると、嘘を吐く気も失せてしまう。あの子の魂は、どこもかしこも真つすぐで真つ白です。だから、私はあなたが真白を好きになってもちつとも驚きませんよ。怒ったりもしませんし」

伝説の聖獣は豊かな髪をゆらり揺らす。

十座がもう一度、今度は盛大なため息をついた。成り行きとはいえ、抱き合ったなどとバレたら一体何を言われるかわかったものではない。十座は心に蓋をすると、何事もなかったような顔をした。

「確かに暗かったですよ。なにしろ夜ですから」

「なるほど」

「それに、確かに二人きりでした」

「それで？」

「……殴られたんですよ。散々。後、馬鹿だと罵られました」

言った瞬間爆笑されて、十座は渋面になる。

「くくくつ、……。そうですか。殴られましたか。十座、あなた駄目ですよ。いくら真白が可愛いからといって、無理やりは良くないです」

「無理やりじゃない！……って、いや、だから、炎駒が思ってるようなことは何も無いと言ったでしょうが！ただ話をしただけです」
「それなのに殴られたんですか」

「……そうです」

不機嫌そうな顔をじつくりとみて、炎駒はすつと真顔になる。

緩やかに巻く赤毛はまるで焰のようだった。瞬間、別人のような神気を帯びて、齡千年の神獣は厳かに天を仰ぐと、

“良き哉”

啼いた。

「・・・何を・・・？」

十座は訝しげに眉をひそめる。

心地よい音階に乗ったその音声は、まるで楽の音のようだった。不思議な音は耳に響いて、しかしどういわけか聞きとれない。さっきの神々しさが見間違いに思える顔で、麒麟は、何も、とにこやかに首を振り、

「真白がそうしたならそれでいいのです。十座はあの子に殴られる必要があったのですから」

不思議なことを言った。

傷跡 1

人の気配に目を覚ますと、眼前には腕を組み仁王立ちした白い髪の娘。

「……早いな」

空はまだ薄暗い。夜明け前なのだ。

十座は愛刀を握る手を緩め、ゆっくりと身を起こした。娘の顔を見上げるが、薄闇は思いの外濃く、その表情はうかがえない。辛うじて不機嫌ではないようで、十座はなぜだかホツとする。

「別に早くない。夜の妖も昼の妖も、この時間だけは大人しいから、今なら森に入っても滅多なことでは襲われないんだよ。だから、起きるのはいつも夜明けの前の今時分。あなたもここに居る気なら合わせて」

「分かった。……で、俺は何をすればいい」

十座は立ち上がり、そう問いかけた。

短時間の眠りの割りに、体はすっきりと軽かった。これも麒麟の神威なのだろうか。一旦寝入ってしまったら、眠りは深く安らかでさえあつて。

故郷の海を離れて二年。

常に悪夢と隣り合わせだった夜の、死ぬまで訪れないはずだった穏やかな眠りに、今は喜びより困惑のほうが大きい。

安らかな眠りなんぞ邪魔なだけだ。

声もなく苦笑する十座をどう見たのか。

真白は訝しげに眉をひそめたものの、ふっと目元を緩めると口を開いた。

「水汲みに行く。手伝って」

くるりと踵を返した途端、揺れる白い髪が真白の横顔を一瞬照らす。

仏頂面の目が赤い。

それで昨夜のことをありありと思い出してしまった十座は、思わず娘から目を逸らした。直後、耳朶を打ったのは何ともつつけんごんな声だ。

「真白だよ」

「・・・なんだ？」

つられて目をやれば、ひどく素っ気無いそぶりながら、真白は十座の目を見返している。

「だから、ま、し、ろ。私の名前だよ。・・・あなたが・・・十座がここに居るんなら名前で呼んで。私も呼ぶから」

真白はそれだけ言うと、用事はすんだとばかりさっさと部屋を出て行ってしまった。

雲海に、時折翼のある妖の影がひらりひらりと見え隠れする。その中に麒麟の守るといふ門が、霞がかかってぼんやり見えた。

十座は戸惑いながらも真白の後を追った。見上げると、山は視界の大半を阻んで呆れるほどに大きい。山頂ははるか雲の上。人の視力では到底追いつかぬほどに、その頂はひたすら高い。住まいにしている洞窟の先には、緑深い木の海が見渡す限り広がっていた。

森は鬱蒼と茂った木々で昼でもなお暗い。開けきらぬ早朝となれば、なおさらに暗かった。注意深く観察しなければ分からないほどの小さな獣道を、押し黙ったまま二人は歩き続けている。

十座は、前に行く真白の後ろ姿を見るときもなしに見た。驚いたことに、真白はここでも丸腰だった。持ち物といえば、肩にかけたなめし皮の大きな袋一つきりだ。歩く度、肩口辺りで白い髪がサラサラと左右に揺れる。肩が、腕が細い。急に昨夜の感触が蘇って、十座は一人静かに狼狽した。たまらず目を逸らそうとした瞬間、その白い二の腕に大きな刀傷を見つけて十座は思わず目を見張る。

よくよく見れば、目立つ傷跡は腕だけにとどまらない。

わずかに見えるくるぶし辺りにも引き攣れたような傷があるし、首筋の下や右手の甲から肘にかけて、獣か妖にでも切り裂かれたと思わしき痕が見える。額の目立つ大きな傷が目くらましになって、今まで気づかなかったがこの娘

「・・・傷だらけじゃないか」

無意識に口に出してしまったらしい。ぼそつと呟いた十座の声に、前を歩く娘がピタリと足を止めた。くるりとその場で振り返り、

「悪かったね。傷だらけで」

じろり凄む。

失言を悟った十座がぐつと詰まったその隙に、真白は触れるほど近づいて下から睨み上げてきた。その黒藍の瞳は海の底のように澄んでいて。

直視できない十座は、それを避けるようについと視線を逸らすしかない。逸らした視線の先には抉れたように深く鋭い爪の痕。滑らかな白い額に走る見るからに痛々しい傷跡を、しかし真白は見せ付けるように晒すのにこりと笑った。

「言つとくけど、私はこんなの全然気にしてないからね。この傷も他の傷も、恥じるようなモノじゃないの。これは全部、私が大切なものを守った証だから。隠すつもりもないし、見たいなら見せてあげる。で、十座はこの傷が見たいのさ。額？腕？それとも足？はつきり言つてよ」

「……………あー、いや。俺が悪かった。……………すまん」

十座は苦りきつた顔で呟くと、悟られないよう吐息を洩らす。見たい箇所なんて誰が言えるか。本人に自覚はまるでないようだが、真白はれっきとした女なのだ。傷　それも顔やら足やらのを簡単に見せてもらうわけにはいかない。真っ直ぐな眼差しの奥に傷ついた色を見つけてしまった十座としては、なおの可言えるわけもなく、それ以上に　。

目の前の傷跡は無残につきた。

一体どれほどの深手だったのだろうと思った瞬間、十座はつりこまれる様に手を伸ばしていた。誓って意識してのことではない。手は勝手に動いて傷に　　真白の額にスルリと触れた。
その瞬間。

「……………あ……………」

真白が弾かれたように後ずさる。

「・・・なんだ?・・・」

ピリリと痺れるような不思議な感覚に、十座がピタリと動きを止める。

真白はハッと目を見張り、伸ばされたままの十座の手を払いのけた。そうして小さく唇を噛む。

「・・・・・・・・ごめん、十座」

「・・・・・・・・いや、こちらこそすまん。つい」

ついなんだと内心大いに焦りつつ、自分の手と真白を交互に眺めて十座はつかの間言葉を見失う。なぜ触ったのか。今の感覚は何なのか。じつと自分の手を見る十座に、慌てたように真白が言った。

「別に触られたくらい何でもないよ。ちょっと驚いたただけだから。この傷は特別で大切な傷で龍を守った傷だったから!」

早口で捲くし立てていた真白は、そこで突然、あ、と叫んで両手で口を覆った。如何にも口を滑らせましたという顔に、冷静さを取り戻した十座が目を細めおもむろに口を開く。

「ほう、龍をな。ということは真白、お前龍に会ったんだな」

傷跡 2

「お前龍に会ったんだな」

静かに問い詰められて真白は思わず目を泳がせた。隠すつもりはなかったが、なんとなく今の十座に龍の話をするのは躊躇われた。まだ早い。そんな気がしたのだ。

「会ったらどうなの。それがなに」

後ろめたさで口調は自然に素っ気無くなる。

「私はここに住んでるの。十座と違っていつでも門を通れるんだし、会ってたっておかしくないでしょ。それから先に言っとくけど、龍爪刀なんかもらってないからね。そもそも、くれると言ったってお断りだよ。刀なんてあんな人斬り包丁、私は金輪際持つ気ないから」「人斬り包丁か。確かにそうだ。……やはりお前は強いな、真白」

それは自らを嘲笑する、ひどく暗い口調だった。真白は苛立たしげに眉を寄せると、ぐっと十座を睨みつける。

「強いのは十座でしょう」

「俺は弱い。丸腰では恐ろしくて外に出ることもできないんだからな。それが臆病者でなくてなんだ」

「臆病のなにが悪いの。勇敢に死ぬより、臆病に生きる方が何倍も難しくて大変なことだって分かっている？それに、武器なんかなくても、人はいくらかでも戦えるんだよ。十座だって」
「気休めは止してくれ」

「気休めなんかじゃない。そんなんじゃないんだよ」

真白はぎゅっと両手を握り締めると、縋るような目を十座に向けた。物言いたげな瞳から、どうしてか目が離せなくなつて、十座は眉間に皺を寄せた。

「やっぱり十座は山を降りたほうがいい。憎しみはより強い憎しみを生むだけで、良いことなんて何もないんだから。強すぎる力は人を不幸にする。龍爪刀は、本当の意味で十座を助けてはくれないよ」
「だからなんだ。俺はどうなるうと龍爪刀が欲しいだけだ。それに、山を下りてどうする。今更この俺に普通の暮らしをしろとでもいうのか。できるわけがない」

吐き捨てて横を向く。苛立ちを抑えきれず、十座は小さく舌打ちした。

悲しげに瞳を曇らせる真白の顔がまともに見られない。そんなを顔させたくはないのに、どうして自分はこうなのだろう。内心忸怩たる思いがつのるばかりで。

そんな十座に、真白は必死に言い募る。

「できるよ。十座ならきつとできる。聞くところによれば、人間の女は綺麗な顔の男が好きらしいじゃないか。十座のその顔なら多少性格が偏つていようが曲がつていようが、女は寄つてくるんじゃないの？嫁を貰つて子を作つて家族を増やして。・・・そうやって普通に生きていけばいいんだよ」

「・・・馬鹿馬鹿しい。顔でどうにかなる話か。俺には普通の生活なんぞ無理だ」

「無理じゃないよ。何とかなるって」

食い下がる真白に、十座は「所詮、他人事だからな」と鼻で笑つ

た。真白の言う事が一々癪に障る。大人気ないとは思っても、棘のある言葉を止められなかった。

「なにが何とかなる、だ。じゃあ、そういうお前こそどうなんだ？
いつまでもこんな所にいないで、さつさと男でもなんでも見つけたらいいじゃないか！」

「・・・私は、・・・私のことなんかどうでもいいよ」

十座の反撃に、真白は目に見えて勢いをなくした。唇を噛んで下を向く。

「どうでもいいってことはない」

「十座には関係ないじゃない」

「じゃあ、俺のことだって真白に関係ないだろう」

「・・・それは・・・そうなんだけど・・・」

真白は頂垂れて唇を噛む。思いが上手く伝わらないことが、悲しくて辛い。十座のことは嫌いではない。本心では優しい人間なのだともう知っている。だから、幸せになってほしかった。十座にはそれができるはずなのだ。

自分とは違って　。

「私は・・・ダメなんだ。人の中には入れない。妖と同じなのは、
十座じゃなくて私の方だから。私は存在するだけで人を傷つける・・・
・・・化け物・・・なんだよ」

化け物。

そう言った真白の声はかすかに震えていた。

「化け物って……俺は別に傷つけられたりしてないぞ」

腹立ち紛れにそう言って、十座はムツと眉をひそめた。

「それどころか、むしろこうして助けられてるだろうが。なんなんだ、お前は。突然訳の分からないことを言いだして」

真白が化け物のはずがない。そんなこと見れば分かるし、それ以前に真白は誰も傷つけない。自分を害そうとした十座や妖まで守ろうとした人間の、どこをどう見たら化け物になるのか。

十座がそう言っても、俯いたまま真白は顔を上げなかった。細い肩がブルブルと細かく震えている。

「真白……お前」

十座が手を伸ばしたその時。

バリバリバリ！

雲ひとつない晴天に、突然の雷鳴が響き渡った。

黒麒麟 1

眩い閃光。

目の前に叩きつけられる漆黒の稲妻。

「十座！」

「真白！」

互いに叫びあつた二人は、鼻を摘まれても分からない濛々たる砂塵の最中にいる。十座が真白を抱え込むようにして身を低くした、その刹那。

「テメエ！真白になにしゃがんだ、このヤロー！」

威勢の良い啖呵は、驚いたことにすぐ目と鼻の先から聞こえてきた。

年の頃なら十になるかならずという所だろうか。

土埃の合間に見えるのは、昔風の装束を身に纏った童子であつた。黒目がちの大きな瞳には深い知性の色がある。艶のある黒髪がふわりと舞い上がって、露になつた額には小さな角。

「麒麟・・・？」

現れたのは稀なる霊獣

麒麟だつた。

人外の気を遺憾なく發揮して、小さな身の内全てから闇色の炎がまさに燃え上がるようである。少年の姿をした神獣は、全身に怒気を漲らせて十座を下から睥睨していた。

「だから、真白触んなつてんだろーが、バカ！いい加減、その

汚ねえ手離せつ！！」

「かくたん角端！」

地団太を踏む麒麟に、十座の腕をすり抜けた真白が笑顔で走り寄る。

「真白お、会いたかったよ！」

蕩けるような笑みを浮かべて、小さな麒麟は白い髪のを娘をひしと抱きしめた。

「うん、私も角端がいなくて寂しかった。お帰り、角端。また会えて嬉しいよ」

「俺も真白に会えてすげえ嬉しい。っと、その前に」

麒麟はビシリと指を刺す。

「おい、その人間！テメエ、よくも俺様の真白を泣かせやがったな！」

ぶっ飛ばす！

角端は十座に指を突きつけたまま、堂々とそう宣言した。

見た目子供だが、しかしそこは流石に聖獣。その双眸に宿る力は凄まじく、呼応して鳴り響く雷鳴とともに呆然と立ちすくむ十座を圧倒した。

「……貴方は麒麟……なのか？」

十座が恐る恐る聞く。黒い麒麟はニヤリと外見に似合わぬ笑みを

零すと、頷いた。

「ハッ！それくらい見りゃわかんたろ、馬鹿かテメエは。聞いて驚け。俺様は黒麒麟^{こつき}角端。ついでに言うと、一の守りで右門の守護者だ！俺様は、だからすんげえ強えんだぞ。分かったか、このヤロー！」

黒い瞳はキラキラしている。小さな麒麟は元気よく言い放つと、引っくり返りそうなくらいふんぞり返った。

「……はあ……それはまた、どうも」

どう答えたら良いものか見当もつかない。十座はしばし途方に暮れて、結果ずいぶんと気の抜けた声を発してしまう。角端は不満げに鼻を鳴らし、

「なんだ、その間抜けな返事は。つか、その前にテメエ誰だ！」

ズイと一步前に出て凄むと、ニコリと微笑んだ真白が代わりに答える。

「角端、この人間は龍に会いに來ただけで、私には何もしてないから安心してよ」

「ああ……と、その、よく分からんがそういう事です。角端殿、と仰るのですか。私は司馬十座と申します」

「……司馬？」

ポツリと眩きが漏れる。角端は十座を上から下まで舐めるように見て 「えっ！」と大きく目を見張った。

「省?!」

喜びと不安がない交ぜの幼い顔。

十座が否定しようとした瞬間、黒麒は勢いよく片足を振り上げると十座の向こうずねを思い切りけり上げた。

「ッ！」

「ちよっ、角端！何をいきなり！」

真白が慌てて黒麒の顔を覗き込む。角端は俯いて、自分の足をじつと見ていた。

「・・・じゃない」

「えっ？」

「・・・省じゃない」

心なしか小さな角も頂垂れてみえた。角端はがっくりと肩を落とすと、

「省じゃないんだな、お前」

囁くようにもう一度言った。

「そうですよ、角端。その人間は省ではありません」

その穏やかな声は頭上から降ってきた。

「炎駒・・・」

いつの間にか現れた赤麒は、中天に浮かんだままその鹿に似た体軀をぶるつと震わせると一瞬で人の姿に変化した。

「角端」

柔らかく名を呼んで、そうしてなお頑なに俯き続ける角端の前に、炎駒はふわりと降り立った。項垂れる小さな肩に手をやり、赤の麒麟は励ますようににこりと笑う。

「本当にびっくりするくらい省そっくりですけど、省ではないんです。角端の好きだった司馬省は、もうこの世にはいないのですから」

「……んなの、分かってる。分かってるけど　でも」

もしかしてと思ったんだ。角端は言った。

ため息と共に吐き出されたそれが、涙声に聞こえたのは空耳だったのだろうか。更に微笑を深くした炎駒が一つ大きく頷いて答えた。

「ええ、ええ、そうですねえ」

私も分かっていますよ、と。

それはもう悲しいくらい優しい声だった。

黒麒麟 2

ちょっとした勘違いです、と言ったのは炎駒だ。

勘違いで本物の雷を落とされてはたまったものではないのだが、賢明にも十座は何も言わなかった。

「まあ、これで数日は妖たちも近寄らないだろうし」

と笑顔で真白。

「そうそう、妖除けだと思えば問題ありませんよね」

にこやかに炎駒も頷く。

「………そうですね」

実際、そこここで感じられた妖の気配は全て消えている。麒麟の雷鳴に恐れをなして、まとめて逃げ出したのだ。

恐るべし、聖獣。

十座は深いため息をつく、気を取り直して口を開いた。

「それにしても、俺のご先祖は貴方方にえらく好かれていたようだ」

苦笑する。

「差支えなければ、蹴られた理由をお聞きたいんですが」

「理由か。いいぞ。教えてやるから、耳かっぽじってよく聞きやがれ。あのな 省は俺に蹴られると泣くんのだ」

角端はそう言うと、なぜだか嬉しそうに胸を張った。

「はあ？」

「だから、何だテメエのその間抜け面は。……省は、痛えとか怖えとか、兎に角すんげえ苦手だったんだよ」

だから蹴ったと角端はあっさり言った。

「ここに居た時なんか、毎日ピーピー泣いてたし」
「……泣いて……そうですか」

なんだか無性に情けなくなつて、十座は頬を引き攣らせた。
それにしても、と密かに思う。麒麟は慈愛の生きものなのではなかったのだろうか。

「あの泣き虫が俺に蹴られて泣かないはずねーんだ。テメエは、省と同じ顔してんのに全然泣かねーのな。つまんねーヤツ」

虫一匹殺せぬはずの聖なる獣は、心底つまらなそうに文句を言った。

「………申し訳ありません」

「や、別に十座が謝らなくてもいいと思うけど」

「そうですよ。逆でしょう普通」

「いいんだよ。そもそも、コイツがこんな顔してんのが悪いんじゃないか」

俺は悪くねーと角端は反省の色もない。

十座は額に手をあて、そうですね、と力の抜けた声を出す。もうなんだかイロイロとどうでもいい気がしてきたのだ。

「まー、兎に角ウチのおチビさんが迷惑をおかけしたのは確かだし、申し訳ありませんでした」

炎駒が何事もなかったような顔で言った。怒ったのは角端だ。

「おいコラ炎駒！なんだその聞き捨てならねー台詞は！誰がチビだ！俺か？ってお前、俺にケンカ売ってんのかっ！」

「売りませんよ、そんなもの。それに売られたって買ってあげませんよ。ふふふふ」

「またそうやって笑って誤魔化そうとしても、俺は誤魔化されねーぞっ！」

「でも、いつもそうやって誤魔化されてくれるじゃないですか、角ちゃんて」

「角ちゃん言うな！」

目を三角にして憤る麒麟を眺めつつ、「角端は子供扱いすると怒るんだ」と真白が十座に耳打ちする。子供のようなりはしていても、すでに数百年生きているのだとも。

「・・・・・・・・アレで俺より年上なのか・・・・・・・・」

十座は頭痛を堪えるために、こめかみをぐいと押した。

「真白また泣かせやがったら、ただじゃおかねーかな。覚悟しろよ」

去り際、角端は十座の襟首を角が触れるほど引き寄せると、にっこり笑顔で恫喝した。

「俺が優しい麒麟サンだからって、何もできねーとか思ったら大間違いだぞ、オイコラ人間。要は、自分の手汚さなきやいってだけの話なんだからな。俺に従う妖なんぞ、ここには掃いて捨てるほどいるんだ。それ忘れんなよコラ、この顔だけ司馬省！！」

「…………顔だけ…………」

絶句する十座を横目に、真白が取り成すように言う。

「あのね、角端。一応、この人間にも名前があるんだよ。呼んでやろつよ」

「えー、いくら真白の頼みでもヤダ。呼びたくねーもん。俺コイツ嫌いだし」

「こらこら、角ちゃん。そんな我俣言っちゃ十座が可哀想ですよ。それに、私たちの力をもってすれば十座なんて瞬き一つで消し炭にできるなんて分かり切った事、改めて教えてあげなくても十座もちゃーんと分かってますから」

笑顔で同調した赤の麒麟は、さらりと恐ろしいことを言った。

「…………俺は絶対に何もいたしません」

辛うじて頷けば、二頭の麒麟はにっこりと笑う。
十座は一人笑えなかった。

真白の決意

呼ぶ声に振り向いて、炎駒は破顔した。

寝そべっていた門の屋根からひらりと空中に身を躍らせ、そのままストンと地面に降り立つ。そうして、炎駒は一向に近寄ってこない相手の所までのんびりと歩を進めた。

「そんな遠くにいないで、もっと近くまで来られたらいかがです？」

「……ご存知でしょうが、俺は門には近づけません」

愛想笑いの一つもない。仏頂面の眉間には遠目にもくつきりと二本線。いつにもまして不機嫌な顔は、一言で言えば凶相といったところか。しかし、麒麟は気にも留めない。

「そうでしたっけ」

真顔でとぼけた炎駒は、赤い目をスウと眇めて十座を見下ろした。

「そろそろいらっしゃる頃合いだと思いましたよ」

邪気のない　ように見える　顔がふと緩む。その笑顔を親の敵さながらの眼差しで睨みつけた後、十座は大きく肩を落とした。

「……分かってたんですね。俺が来るってことを」

「もちろん、分かってましたよ。　真白のことでしょう」

「そうです！というより、それ以外何があると言っんですかっ！」

悲鳴のような声は怒鳴ると言うより叫ぶに近い。最近とみに忘れがちな神獣への敬意を取り繕うこともせず、十座は炎駒に詰め寄っ

た。

「何なんですかアイツは！なんだってあんなに無茶苦茶なんです！俺にはもう訳が分かりません！」

事の始まりは、数日前にさかのぼる。

「よくよく考えてみたんだけど」

その日の朝、開口一番に真白はそう切り出した。

「改まってなんだ。……いや、待て。ちょっと落ち着け、真白」

この娘と出会ったのはごく最近のことだが、その常識を覆すどころか踏みつけた後に蹴散らすような言動は油断ならざるものがあるのだ。十座は警戒感もあらわに眉を寄せた。

真白の頭の中は、時に十座には謎だ。だからだろうか。誇らしげな真白の表情にひどい胸騒ぎを覚えた十座である。

「私は元から落ち着いてるよ。それより、聞いてよ。すっごく良いこと考えたんだから」

「お前がそういう顔をして、本当に良い事だったことがあるのか？……まあ、いい。とりあえず言ってみる。聞くくらいは聞いてやる」

渋々言つと、真白は嬉しそうに微笑んで、うん、と大きく頷いた。

「剣を使えない今の十座は、自力では身を守れないよね。門の周囲には危険な獣も妖もないからこの周りで生活するだけならいいん

「ただ、よく考えたらそれじゃあ門をくぐった後で困るでしょう。だから今日から必要なことは教えてあげるし、私が十座を守ってあげる。十座はそのきれいな顔が唯一の取り柄なんだから、見えるところはかすり傷一つつけないように全力で守るから」

「はあ？……お前なにを」

前半はともかく後半が全くもって意味不明だ。思わずポカンとする十座に花が綻ぶような笑顔を向けて、真白は念を押すように言った。

「あ、これは最初に言っとくけど、守るのは十座のためだけじゃないから。十座の友達の地央って奴のためだからね。そこそこ間違えないで」

「……いや、だから一体何を言ってるんだ。お前が俺を守る？顔を傷つけないって、意味がわからん」

「ここは本当に物騒な場所だから、人が無傷で過ごすのはまず無理なんだよ。だけど、十座はいずれここを出て人間の中で幸せに暮らすわけだから、見た目は死守しないとね」

なんでそうなるんだという十座の問いはきれいに無視された。これは説明ではなく決定事項の事後通達だと真白は笑顔でそう言う

「だから、その綺麗な顔を傷つけるのは良くないって言ってるんだよ。なにせ十座は性格が悪い分を顔で補わないといけないんだし」

「お前に俺の性格をとにかく言われる筋合いはない。そもそも顔で補う必要なぞどこにある」

「なんでよ。悪いでしょう性格。だから補うんじゃないの、その綺麗な顔で」

「だから、そんな必要がどこにあるんだ。っておい、人の話を聞け。顔なんかどうでもいいと何度言ったらわかるんだ！バカか！」

「バカじゃないし、どうでもよくない」

十座の話を遮って、真白はずいと詰め寄った。

「人間にとって見た目はそれはそれは大事なことでしょ。外見が多少見苦しくても私は気にしないけど、聞くところによれば人の世ではそう言う者は少数らしいじゃないか。幸い、十座はみてるだけには良いんだよ。こんなところでうっかり傷モノになったら大損じゃない。労せず楽しく暮らせる資質を、みすみす失う手はないよ。長所は大事にしなきゃ。大丈夫。その綺麗な顔ごと全部、この私が守ってあげるから心配しないで」

にこにこ笑いながら、楽しみに真白は言う。対して十座は苦虫を噛み潰したような顔だ。

「心配しないでってなんだよ。落ち着け、真白。それから俺の話を聞け」

「聞かない。もう決めたし」

「だから、勝手に決めるな！それに、なんで俺が守られなくちゃならないんだ！守るのはむしろ男の俺だろうが！」

「えー、なんで十座が私を守るのさ。十座は私より弱いじゃないの」

拍子抜けするくらいあっさりと真白。その顔を穴があくほど見た後で、十座はため息をついた。

「……………ああ、もういい。勝手にしろ」

「うん、勝手にする。……………ありがとう」

「……………は？」

十座は先に行く後ろ姿を茫然と見た。緩々と首を振る。礼を言わ

れる謂われなどない。

どうせガキの気まぐれ。何もできやしないさ。

十座はその時そう思った。自分は精進潔斎して殺生はせぬと誓いを立てている。食料はもっぱら木の実や山菜、それに果物くらいだから獲物を狩る必要もない。ならばそうそう危険はないし、守られることなどない、と。

だが、これが甘かった。

食物を求め獣が集まり、獣を求めて妖がまたそこに集まる。世の理であった。

自分が口にした言葉を十座が心底後悔するのは翌日のことだ。

相柳

「いた、相柳^{そうりゅう}」

岩陰に身をひそめ、真白が小さく耳打ちした。

ここは森の深部。豊かな湧水がここに湧き出る香椿に似た巨木の下である。

その大蛇に似た妖は、たわなに実った果実の下でとぐろを巻いて寛いでいた。その周囲には、大小様々な大きさの骨が散らばっている。食事の後なのだろう。

「…でかい」

十座は目を見張ると、ごくりと喉を鳴らした。

この大蛇、もちろんのこと普通の獣ではない。その証拠に、蛇ではなく人間の頭が合計九つ、一抱えも有りそうな太い胴体に乗っかっている。それぞれの頭は各々意志を持つかのように、四方八方をうねりながらユラユラと揺れていた。つまりはまるで隙がないのだ。

「食後だからって油断しないで。アレは大喰らいで、あの程度じゃ満腹には程遠いんだよ。なにしろ首が九つだから」

九頭分だよと真白。

「の、ようだな」

そのあまりのおぞましさに頬を引き攣らせながら、十座が答える。

「私がおびき寄せるから、十座はその間に取れるだけ取っというてよ」

「囧なら俺が」
「それは無理」

即座に却下された。

「相柳は十座が考えているよりずっと素早いんだよ。それにアレは毒を出す。間合いを計れない人間が行ってどうするの。私なら毒を吐かせず、十分に遠くまで引きつけた上で帰ってこられる。十座にそれができる？」

「……分かった」

そう言われれば、反論もできなかった。十座は渋々頷いた。

「それと……十座、一応これ食べといて」

「なんだ、これは」

「桂坐草。毒消しだよ」

手渡した薬草を十座が口に含むのを確認し、真白は妖のいる場所に近づいていく。物音ひとつ立てず、滑るように岩の割れ目に体を滑り込ませる動きは流石に慣れている。そのまま躊躇せず進み、九頭の大蛇の風下へと移動していく。

大したものだ、と十座は感心するしかなかった。

真白の動きには少しの無駄も隙もない。敵も立地も熟知した者の動きだった。

真白はさらに前に出る。妖は気付かない。

その時だった。

相柳は九つの鎌首を一斉にもたげ、ぞつとするような声で啼いた。

「っ！…しまった」

真白に気を取られて、つい身を乗り出しすぎた。たまたま十座の方を向いた頭の一つと目が合ってしまったのだ。生気のない中年男の顔は、ニイと唇を歪めせると牙を剥きだして十座に襲いかかってきた。

早い。

それも尋常でなく素早い。十座の背筋を悪寒が這い上がる。とても避けられる速度ではなかった。

「くそっ！」

十座の得物は小刀一本だけである。殺生をしないと決めて、愛用の大刀は封印したのだ。小刀一本に、相手は九頭。狙いも定めきれない。

「十座！」

真白が慌てて駆け寄るのが見える。

「来るな！逃げろ！」

向かってくる頭三つまでを辛うじて避けて、十座は叫んだ。とたんに、目の前に大きく口を開けた子どもの顔が迫る。真つ赤な口内に、不釣り合いなほどに巨大な牙。そのどろりと濁った眼に生氣はなく、何かが腐ったようなひどい悪臭が鼻をついた。

「くっ！」

「駄目だ、十座！相柳の血には毒が」

刀を振り上げたのはほとんど反射的だ。耳朵を打つのは悲鳴のよ

うな真白の声。血液に毒があるなら傷つけるのは危険だ。だが、選
択の余地はない。

十座は、咄嗟に妖の左目に刀を突き立てた。決るように横に引く。
血飛沫が横に舞った。十座はわずかに身を引いて、飛び散る飛沫を
間一髪で避ける。

だが、妖は僅かも怯まなかった。禍々しい色の血を噴き出しなが
ら、凄まじい速さで十座に襲いかかってくる。これではとても避け
られない。

ここまで、か。

十座が覚悟した瞬間。ごぼりと空気が動いた。目の前で見えない
何かの気配が凝り、急速に膨らんでいく。

「…な、んだ？」

「薙ぎ払え、風伯」

凜然と命じる声がする。それと同時に、嵐のような突風が十座と
妖の間を席卷した。十座は弾き飛ばされ、背後の岩にしたたかに背
を打ちつける。大きな衝撃に、一瞬十座の息が止まる。意志の力で
無理やりこじ開けた目に飛び込んで来たのは 青い炎。

「炎帝、浄化の火を放て」

周囲とそれから私にも、と苦しげな声が続く。

「……真白？」

あわてて身を起こした十座の目に飛び込んできたのは、炎に包ま
れて喘ぐ真白の背中だった。

守り手

青白い炎は瞬く間に消えうせた。

さつきまでいた筈の大蛇の姿も、跡形もない。

「どうして……真白！」

一瞬茫然としたものの、十座はすぐに真白に駆け寄った。真白は、血まみれの左腕を抱きかかえるようにして地面に突っ伏していたのだ。

食いしばった唇から苦しい呻き声が洩れる。顔色が尋常でなく悪い。毒の血を浴びたのだ。

「なんで真白が……」

この毒を浴びるのは自分だったはずだ。十座は愕然と立ちすくんだ。

「……うるさい。……私は……大丈夫……黙って……なよ」

「大丈夫じゃない！なんでお前がこんなこと」

「だ、から、守る……って言った……よ」

「守るだど！お前、なに馬鹿な事言って」

「馬鹿な事……じゃない、よ。それより……顔は？」

無事なのかと問うその一言に、とうとう十座が切れた。

「馬鹿野郎！いい加減にしろ、真白！こんな時に男の顔の心配するやつがどこに居る！」

「ここ、に居る、じゃない。もう、十座……うる、さい……わーわー」

「騒がないで、よ……私はなんとも、ない、ん、だから」
「それがなんともないって顔か！って、真白、お前その足！」

十座の顔が更なる驚愕に歪んだ。

真白の右足首には、折れた蛇の牙が二本、無残にも突き刺さっていたのだ。

「噛まれたのか、妖に！」

「大丈夫、夫、だって。もう、毒は、消した、から。それに、こういうのには……慣れてる……し」

「慣れてるって……馬鹿か！そういう問題じゃないだろ！」

「大声、出さないで！別の妖を、呼び込む気なの。私なら、大丈夫、だから。本当に、慣れてるんだよ。それと、牙は……抜かないで」

抜けば止められていた血が噴き出す。血の匂いに誘われて妖や獣が集まってくる。

覚えておいてと言う顔は、すでに苦痛を覆い隠して平然として見えた。

十座の視線を真っ向から受け止めて、真白はゆっくりと立ち上がった。蒼白な顔で、まだ左腕は押さえたままだったが、漆黒の瞳から生氣は失われていない。

「お前……本当に大丈夫なのか」

「うん、もう平気。心配かけて、ごめん。でも、ホント大丈夫だから」

そう言ってふわりと笑う。

この傷で平気なわけがないのだ。それでも、その穏やかな顔に十座はホッと肩の力を抜いた。

「なにぼけつとしてるの、十座。今のうちにとつとと食料を確保してきてよ。あ、それと慌てて顔に怪我しないでよ」

　　無然とする十座の腕に空の袋を押し付けて、真白は鮮やかに微笑んでみせた。

堂々巡り

太陽はすでに山の傍に消え、焚き火の一つの岩室は薄闇に包まれている。

「なんであんな事をした。…どうかしているぞ、お前」

ここは十座が居候中の洞穴の中。直後に問いただす事が出来なかった分、蓄積された怒りは根深いものがあつた。フツフツと湧いて出る怒気にまかせて、十座は射殺しかねない形相で真白を睨みつけた。

だが、怒り狂う男もどこ吹く風、真白は淡々と焚き火に薪を投げ入れている。一瞬火勢が強まって、二人の影が洞窟の壁でゆらゆらと踊った。

「おい…聞いているのか、真白！」

「そんな大声出さなくても、ちゃんと聞いているよ。全く、十座はなんでそうおっかない顔するかな。別に怒るようなことでもないのに、大体この程度の怪我、ここじゃ怪我の内にも入らないんだよ。それにもう痛くもなんともないし。十座も十座の顔も無事で、食料も手に入った。万々歳じゃない。一体何がそんなに不満なのさ」

訳が分からないと言う真白に、信じられない面持ちで目を見開いたのは十座だ。

「何が不満だと。真白、お前正気か！いいから、その腕と足をよく見てみる。毒を浴びて、その上大蛇の牙が刺さったんだぞ。一体、何針縫ったんだ、十か二十か。くそっ、何が怪我の内にも入らないだ。お前は馬鹿か。生憎だが、無事なのは俺の体だけなんだよ。お

前のせいで俺の矜持は瀕死の重傷だ。ふざけるな！」

「だから、ふざけてないって。…だって、しょうがないじゃない。あそこで十座を守るには、ああするしかなかったんだから」

仕方がないと言わんばかりのその顔に、十座の怒りが収まるはずはなかった。

「守ってくれと誰が頼んだ。俺は自分の身ぐらい自分で守れる。女のお前に守ってもらう必要も理由もない。あんなこともう二度とするな。絶対にだ！分かったか！」

「私は頼まれたから十座を守ったわけじゃない。守る必要があったのも私で、守る理由もあるのは私。言っただでしょ。私が守りたいから守るんだって。こうするのは私の意志なの。だから十座がするなっっていつても、私はやめない」

「…ふざけるなよ、真白。いいから、やめろ」

「やめない」

「やめろ」

「やめない」

二人は焚き火をはさんで睨みあった。頑固なのはお互い様で、どちらも自分の意思を曲げるつもりは毛頭ないのだ。不意に吹き込んだ風が炎を揺らす。真白の腕と足首に巻かれた包帯の白と、その髪の毛の白さを浮き上がらせるように、焚き火の灯りはゆらりゆらりと大きく揺れた。

ばつの悪い顔で、十座がふいに視線をそらす。

「…これ以上、傷増やしてどうする気だ。馬鹿じゃないのか」

「別にいいよ、馬鹿で。…それに勝手にしろって言ったの、十座じゃないか」

ぼつりと呟いたのは真白だ。その眼差しが真つ直ぐに十座を射抜く。口ほどに物を言う瞳に瞬間完全に言葉を奪われ、十座は小さく舌を打った。

「ああ、確かにそう言ったさ。言ったが、まさかあそこまでするのは普通思わないだろう」

投げやりに言う。

「そんなこと知らないよ。守ると決めたから守っただけだし。別に命取られたわけでもないんだから、いいじゃない。あんな怪我、ホント大したことないだよ。十座が気にすることない」

「阿呆か。お前が気にしなくても、俺が気にするんだよ。それに、お前の傷は大したことだ。かなりの深手だぞ」

「深手だなんて大げさな。この程度の傷いつものことだし、どうってことないよ。何度も言っただけど、私は慣れてるの。こんなの放つとけば治るんだから。間違いなく軽症だよ」

「お前、まだそんなことをっ！」

堂々巡りである。

ガタリと音を立てて薪が燃え落ちる。

焚き火を挟んで二人は再び睨みあった。

優先順位

仕方がない。十座はため息をつく、慎重に口を開いた。

「…真白、お前は術者なんだな」
「そうだよ」

聞かれるのは分かっていたらしい。真白の答えは拍子抜けするほどあっさりとしたものだ。

「で、なに。私が術者だったらどうだっていうのさ」
「別にどうもしやしない。術者だと確認しただけだ」
「…そんなもの確認してどうするのさ」

楽しい話ではないのだろう。真白はため息をついて横を向いた。
今日、真白は十座の目の前で九頭の大蛇、相柳をあっけなく吹き飛ばしたのだ。術者だと気づかないほうがどうかしている。だが、それをわざわざこの場で確認する意味を計りかね、真白は小さく眉根を寄せる。

「真白、お前あの時印も詠唱もなしに術を使ったよな。そんな事ができる術者なんて、俺はこれまで聞いたこともない。お前はなぜあんな事ができる。お前は 何者なんだ」

通常、術者が術を使うには複雑な印の組み合わせと長い詠唱を必要とする。応国お抱えの高位の術者ですら、それは例外ではない。術者の術は強力だがとっさの攻撃には無力。それを覆すものがあるなどと、聞いたこともなかった。

だがあの時、真白はほとんど無詠唱で続けざまに術を繰り出して

いた。はつきりと確認したわけではないが、印を結んだ様子もなかった。

術者は四精のいずれかと契約して術を使う。四精の矜持は恐ろしく高く、契約しようがしまいが、そもそも人が命じて従うような相手ではないのだ。その四精が、真白の言葉には素直に従った。真白の術者としての実力が、並々ならぬものであることは疑いようもない。

「何者って…私は私だよ。それ以上でもそれ以下でもない」

力ない呟きは、だが確固とした拒絶の色を帯びていた。十座は一つ大きくと息を漏らすと、つとめて明るいい口調で聞いた。

「分かった。嫌ならもう聞かない。だけどそれなら、なんで最初から術を使わないんだ」

「…使わなくてすむなら、こんな力使わない方がいいからだよ。妖だって生きてるんだし…傷つけたくない」

「はあっ？お前、何馬鹿なこと言ってるんだ。初めから術を使えば、怪我しなくていいんだぞ。使わない方がいいって。…おい、まさか真白、お前妖を傷つけたくないから術を使わずに済ませようとした…なんてこと、ないよな」

まさか、と。恐る恐る十座が問えば、しかし真白はこっくりと頷いて言った。

「そうだけど、それがなにさ。妖だって人だって、誰も傷つかないにこしたことないじゃない」

そう当たり前のように言われて、十座の顔色が変わる。

「…お前っ！…それまさか、本気で言ってるのか、真白！」

「なにそれ、失礼な。私はいつだって本気だよ。妖傷つけたくないことのなにが悪いのさ」

「なっ！悪いに決まってるだろうがっ！妖庇って自分が怪我するって、お前の頭の中は一体どうなってるんだ。世の中、優先順位つてやつがあるだろうが！少しは考えろ！」

「優先順位はちゃんと考えてるよ。えーと、まず一番は十座の顔、その次が十座の体、最後に妖の順だよ。ほら、妖はちゃんと最後じゃないか」

なぜだか得意げな真白に、頭を抱えたのは十座だ。

「おいこら、ちょっと待て、真白。肝心の自分が抜けてるってどういうことだ。お前の順番はどこだ」

「あー、私か、私ね。うーん…じゃあ、十座の顔と十座の体、そして妖その後に私、かな？」

「はあ？いい加減にしろ！なんで自分を一番最後にする！意味が分からん！」

「え、意味はあるよ。私は丈夫で怪我しても平気だし、すぐ治るから最後でいいんだよ。今もちゃんと生きてるんだし、十座がそんなに気にしなくても」

「気にするわ！馬鹿者」

洞窟に十座の絶叫がこだまする。真白が無言で耳を塞いだ。

「…もういい。…とにかく真白、お前明日からはすぐに術を使え。分かったな」

「分からないし使いたくないから使わない」

「分からなくてもいいから使え」

「使わない」

「使え」

「使わない」

「使えッたら使え！」

「使わないッたら使わない！」

不毛なやり取りは、結局深夜遅くまで続いた。

心配

こんなことが、それから数回。

結局のところ、無傷で無事に食料を得られたことは今のところまだ一度もない。つまり、こういう事態は一度では済まなかったわけだ。

出かけるたびに妖や獣に出くわし、見る間に真白の傷は増えていった。そして「慣れてるから大丈夫」の一点張りもそのまま。十座にしてみれば冗談事ではなく。

「あー、成程。つまり十座が使えないせいで、真白が怪我をしたわけですね」

「…面目ない」

苦虫を噛み潰したような顔で十座が言った。

更にただけでない事に、十座は全くの無傷なのだ。これでは何もせず布団の中に包まってでもいた方が数倍ましだと十座はほぞを噛む。

十座は男だ。腕に覚えも十分ある。どう考えても、十座が真白を守るのが正しいというのに、現実はまるで逆。それも、理由は十座の綺麗な顔を守るためときているから尚のことやりきれない。

真白は、どんな危険な場面でも少しの躊躇もなく十座の前に立ち自ら盾になった。十座にはもうどうかしているとは思えない、つまりは狂気の沙汰である。

「いい度胸だな、オイコラ。真白傷つけんなって言ったの、忘れたわけじゃねえだろーな」

目の前には、いつの間にか門から降り立った角端がいる。十座は

複雑な表情でため息をつく、しっかりと頷いた。

「忘れてなどいませんよ。間違いなく全部俺のせいですから。煮るなり焼くなり存分にどうぞ」

「良く言っ たな、役立たず。後悔すんじゃないぞ」

「まあまあ、角ちゃん」

笑顔で角端を取り押さえて、炎駒は十座に向きなあった。

「冗談はともかく、十座の言いたいことは私たちもよく分かってるんですよ。なにせ、真白は誰にでもあんな風ですから。見てる方がたまらないという気持ちは当然です」

しみじみと言う。じたばた暴れる相方を抱きしめながら、炎駒は穏やかな笑みを浮かべた。

「いつもって。…いつもアイツはあんな事を？」

「ええ、そうなんです。今までいろんな人間がここに来ましたけど、その度に庇うので真白は生傷が絶えなくて」

「ご覧になったでしょ、と炎駒。十座は啞然と目を剥いている。

「それだけじゃねーんだ。中には真白利用して楽しようとかいっ勘違い野郎まで居やがったからな」

角端は怒りを隠そうともしない。

「ま、そういう不逞の輩は、私たちできっちり身の程をわきまえさせて差し上げるのでいいんですけど」

「じゃあ、真白の体中の傷は、そいつらを庇って」

「全部が全部じゃありませんけど、まあ大方そういう感じです。だから、十座だけのせいじゃないんですよ。それで気が楽になるわけじゃないでしょうけど」

「つまり、てめえだけ特別なわけじゃねえってことだよ。うぬぼれんな、バーカ、バーカ」

赤麒麟の腕から逃れた黒麒麟はぴょんぴょん飛び跳ねる。赤い麒麟は目を細め、その黒髪を優しく撫でた。

「まあ、それはそうなんですけどねえ。でも、角ちゃん。さすがに傷一つつけないって十座が始めてじゃありませんか。確かに、十座は男にしておくのが勿体ないくらいの別嬪さんではありますが」

「ああ、そりゃーな。顔だけはいいいからな、コイツ。省に似て」

二頭の麒麟は真顔で頷きあっている。ヒクヒクと引き攣る頬を押さえつつ、十座はげっそりと肩を落とした。

「顔のことはもう結構です」

これ以上顔のことで何か言われたら、麒麟といえども許し難い。十座は仏頂面のまま、ぐっと拳を握りしめた。

「ま、別嬪さんの顔の話はおくとして、真白がなんでああなのかお知りになりたいのですよね」

「そうです。どうしてあんな風に自分を犠牲にしてまで、他人の俺を庇うんですか。それだけじゃない。あいつは自分より妖を庇おうとする。俺にはさっぱり理解できません」

そうでしょうねえ、と麒麟は頷いた。それから、ちょっとばかり切なそうな顔をする。

「真白はいつでも自分は二の次なんです。慣れているし大丈夫だと本気で思ってるんですよ、あの子。助けられる方にしたらたまりませんが、それにはちっとも気がつかない。困ったものです」

「それもこれも、みんなこの馬鹿が悪いんだろ。この使えねえド阿呆がへましゃがるから」

「それに関して、言いわけはしません」

麒麟の非難は正当なものだ。十座は、内心の忸怩たる思いを噛みしめる。

「だから俺は嫌だって言っただんじゃねーか、炎駒。こんなヤツがいるから、真白が」

「間違えないでください。これは十座のせいではありませんよ、角ちゃん」

「でも炎駒、こいつのせいで真白は」

「角端」

静かな、それでいて有無を言わせぬ声だった。炎駒の赤い目は驚くほどに能弁で、いつも強気な黒麒麟も黙り込む。角端は悄然と項垂れると、唇を強く噛んで横を向いた。

「…わ、分かってら、そんなことくらい。俺にだって分かってんだ。でも」

「ええ、ええ、そうですねえ、ホントに」

心配ですよねえ。

炎駒の声は限りなく優しい。赤い目をした聖獣は、澄み切った眼差しを十座に向けると穏やかな声でひっそりと言った。

「少し昔の話をしましょうか」

運命の出会い

「運命などという胡散臭いものを信じるつもりはありませんが、もし存在するとすれば」

意外にも現実主義らしい赤い目の霊獣はそう言つと、クスリと小さく笑みをもらした。

「あの日あの時あの場所に私達が居合わせた事が、正しく運命そのものでした。尽きずに続くこの生も、そう思えば満更捨てたものではないと」

「ああ、俺もそう思った。つか、会わねーで見殺しとか冗談じゃねーし」

角端が真剣な顔で言えば、炎駒も「全くですよ」と真面目に答える。

「見殺しって、それはどういう」

物騒な台詞に敏感に反応した十座をにっこり笑顔で遮って、炎駒は話し始めた。

「あれは人の時で数えると、丁度十年ほど前。冬も間近な良く晴れた夕刻でした」

その日、二頭の麒麟は揃って国境を隔てる大河の遙か上空を天駆けていた。

水平線が見えるほど長大なその河の名は、双春江。
悠々たる流れは澄み切って青く、河口に近づくにつれその色を鮮

やかな緑へと奇跡のように変化させ、清浄な流れを海へと運ぶはずだった。いつもならば。

「炎駒、これって」

足を止め青ざめた顔で絶句したのは、黒麒麟角端。

「ええ、これはちょっと、ひどいですね」

同じく顔色を失った赤麒麟が眉をひそめる。

丁度二丈分ほどはあろうか。

眼下に望む川岸付近の川面は今、くつきりと色分けされたように朱に染まっていた。紛うことのない、それは血の色。たつぷりと怨嗟を含んだ朱の色は、清廉な流れを毒々しい穢れへとみるみる変貌させていた。その凄まじいまでの呪詛の色。湧き上がり絡みつくような腐臭に、たまらず霊獣たちは風上への移動を余儀なくされた。

人の眼には分かるまい。

だが、彼らは神獣、麒麟であった。

一体何をどうすれば、これほどの恨みをかえるものなのだろう。許容量を超えた恨みと辛みと嫉み。それらはドス黒いもやと化し、倒れ込む何かにべったりと纏い付いていた。その「何か」は、よくよく見れば人の形で。意識のない様子で、ぐったりと水面に倒れ込んでいる。下半身を水中に、上半身を辛うじて岸に乗せた傷だらけの体は驚くほどに小さく細い。

「なんだ、コイツ。まだ、ホンのガキじゃねーか。どうしてこんなチビが」

倒れているのは子供だった。この辺りでは見かけない白い髪が、飛び散った鮮血でまだらになっている。血の気のない横顔はあどけ

なく、実年齢はともかく外見だけなら十歳児の角端よりも更に小さく華奢だった。見るからに非力な、傷ついた人の子。

思わず駆け寄ろうとする相方をそっと押し留め、炎駒は小さく首を振ると、

「たとえ子供でも、これほど穢れていては私たちでもとても助けられません。さあ」

行きましようと、先を促した時だった。血まみれの小さな手がピクリと痙攣した次の瞬間、子供はゆつくりとその目を開いた。現れたのは深い海底のような黒藍。小さな人の子は、空中の麒麟を見止めると一瞬不思議そうな顔をして、ふわりとわずかに笑みをもらした。

「嘘…だろ」

「嘘…ですよね」

二頭の麒麟は目を見張り、宙に浮いたまま呆然と立ち尽くす。にわかには信じられないことだった。過ぎるほどの穢れをまとい、なのにこの子供の魂は穢れるどころか呆れるほどに無垢だったのだ。人ならざる眼に映るその魂の輝きは白く美しく。五百年と千年の永きを生きて尚、これほど綺麗な魂を持つ人間を見たのは久しぶりのことだった。

清浄で真つ白な魂は儚く、今にも消えそうに揺らめいている。

「炎駒、このチビ助けるぞ」

「ええ、角端。助けましょう」

今度こそ否はなかった。

ほとんど門を離れることのない麒麟が、それも揃って出かけるこ

となど百年に一度あるかないか。この奇跡のような邂逅が運命ならば、それに乗ってみるのも悪くはないとそう思えたから。

白い髪の愛し子と聖獣の、これが出会い。

「とりあえずの穢れを祓うだけで丸一日、そこからやっとう傷の手当を施して、ここに連れ帰れるほどになるまで更に三日はかかりましたか」

「だな。なんせハンパねー穢れようだったからな」

その時のことを思い出したのか、やけにしみじみと角端が言う。

「そうそう。私も角ちゃんも、結局穢れに当てられてすっかり死にかけたんですね」

「あー、あれはマジやばかったよな。俺、もう駄目かと思ったし」

「ざっと百年は寿命が縮みましたね」

縮んだ縮んだと顔を見合わせて暢気に笑う麒麟に、噛み付いたのは十座だ。

「寿命縮んだって、それ笑い事ですか！それに、十年前なら真白は精精七つとか八つでしょう。そんな子供がどうしてそんな恨みを買うようなことになったんです！おかしいでしょう！！」

大声で叫んだのは、頭が酷く混乱していたからだ。真白は愛されて育った娘だと思っていた。少なくとも、そういう子供時代を送ったのだろーと思ひ込んでいたのだ。本当の苦しみを知らないから、あんな自分そっちのけで他人のことばかり心配するようなお人好し

になるのだと。

でも、違った。そうじゃなかった。

強張った顔の十座に、炎駒はほろ苦く笑う。

「十座の言う通りですね。本当におかしな話なのです」

真眼 1

「ここから真つ直ぐ西南の方角に双春江があり、その河口に界齊かいさいの都があります」

炎駒は語る。

表情は淡々としたものだったが、その声には何とはなしに苦いものが含まれて、この話が決して愉快なものではないと教えてくれた。

「十座も司馬でしたら聞いたことくらいはあるでしょう」

司馬家は諸国でも有数の船主であり貿易商。炎を纏って天を仰ぐ黒馬の紋章をいただいた商船は、どんな辺境の港にでも碇を下ろす。自然、司馬家の人間は、他国の情勢にも明るいのが常だった。

「界齊：というところの界齊市のことでしょうか。なら、仕事で何度か訪れたことがあります」

紛れもなく十座もそうした司馬の男の一人であった。考え込むこともなく、すんなりと答える。

「界齊は、たしか号国の一番北にある街ですよ」

「流石、よくご存知ですね。そうです。北方の白き胡蝶と謳われる北の都が界齊です。角ちゃんが行ったことありましたっけ」

「界齊はねえよ」

「どんなだ、と聞く顔は無邪気で、とても齢五百年の靈獣とは思えない。」

「ああ、そういえば角ちゃんが行った時分は、まだ界斉とは呼ばれていませんでしたか」

「うん、そんな気取った名前じゃなかった。あそこら辺一帯は……たしか北波って呼ばれてた気がすんな。人なんかほとんど住んでなくて、森と草原と海だけの静かなトコだった気がする」

かつて北波と呼ばれた北の地は、今から百五十年ほど前の政変により界斉とその名を変えていた。角端は少しだけ懐かしむような顔で腕を組んだ。炎駒が頷く。

「私は行ったことがありますよ、界斉。白い石でできた建物が沢山あって、上からだと言全体がまるで雪が降った後のように見えました。清潔そうな街でしたね。不浄のものなぞ一欠片もないような」

まるで良くないもの全てを覆い隠すかのごとく。

炎駒は低く呟くと、突如その顔から一切の表情を消してしまった。穏やかな麒麟が一瞬だけ見せた、それは強い憤りで。なぜかと訝しく思いながらも、十座は答える。

「その白い石が有名な界斉の英石です。あれほど質の良い英石は、界斉でしか産出しないと言われています。界斉の海は他より緑の色が濃い。晴れた日の海からの景色は、一見の価値がありますよ。海の緑と空の青と町の白がそれぞれ競い合うように鮮やかで、それはそれは見事なものです」

「そうですね」

そのたった一言に込められた響きに、十座は驚いて目を見張った。少なくとも、この麒麟にはまるで似つかわしくないヒヤリとするほど冷たい声だったのだ。なぜかは分からない。だが、ひどく嫌な予感がした。

「その界斉が、なにか」

「界斉をご存知なら、当然経堂のこともご存知ですよ」

「ええ、もちろん。経堂家を抜きにあそこで商売はできません」

経堂家は号国一の名家。司馬には及ばないものの、歴史の古い豪商である。

界斉で何か商おうとする者は、まず経堂家を通すのがしきたりだった。

「こと商に関しては、国主も物乞いも同列の司馬にしたらバカらしいことでしょうが、その経堂です。それでしたら、彼らがなんて呼ばれているかもご存知ですね」

「それは…眼の一族、ですか」

経堂は、またの名を眼の一族と称する。

経堂家には、時折「眼」と呼ばれる特殊な能力を持った子供が生まれてくる。それが所以だ。

「噂では、眼を持つ者は人の心を読むとか」

さしもの老練な司馬の商人たちでさえ、皆一様に経堂の眼を恐れていた。眼には商売の駆け引きが通用しない。そういう話を、十座はかつて幾度となく聞かされてきたのだ。

炎駒は満足そうに頷くと、

「これはいかに司馬でも知らないことでしょうが、実は眼には二種類あるんです。通常知られている眼ともう一つ。真実の真に眼と書いて、真眼」

「真眼…」

聞いたこともなかった。

真眼 2

「真眼…ですか。それは聞き覚えがありませんが。どう違うのですか」

「んー、そうですね。違いは簡単。男が眼で女が真眼なのです」
「そだな」

角端がこくりと頷く。えっ？と大きな声を出したのは十座だ。

「ちょ、ちょっと待ってください。確か眼というのは男子にしか継承されないはずですよ。女子にはいないと聞いていますが」

眼は男系にのみ現れる。これは司馬でなくても知っている世間の常識だ。

「ええ、そう言われてますね、表向きは。でも、それ間違いなんですよ」

「それは…どういう意味ですか」
「どういう意味もこういう意味もねーんだよ。馬鹿か teme 工。あのな、ホントの眼ってのは元々女のもんなの。男はおまけ」

イラッとした顔で睨みつけたものの、結構丁寧に説明するあたり角端もやはり麒麟なのだ。妙なところで感心する十座を睨み上げながら、角端は律儀に先を続ける。

「teme 工らが知ってる「眼」ってのは、まあ本来の能力からすりゃあ残り香程度のモンにすぎねーんだ。俺に言わせりゃ多少他の人より良く見えるって程度のどーってことない代物さ。まあ、それ知ってんのは同じ経堂でも本家筋だけみてーだけだな。分家含めて誰も

知らねえ経堂の秘事なんだよ」

本来の眼の持ち主を、経堂は真眼持ちあるいは真眼憑きと呼ぶという。真眼は希少な眼に比べても更に数少なく、ここ数世代にわたって出現すらしていないと麒麟は言った。

「真眼憑きですか。はじめて聞きました。では眼より実力は上なんですね」

「上なんてものじゃありません。真眼の力は凄まじいものです」

真眼は相手の心のすべてを読み取る。それも洗いざらい、と炎駒は言った。

「それだけじゃねーぞ、真眼はすべての術の本質を見切っちゃうんだ」

「それは、つまり見ただけで会得できるということですか。まさかそんなことが」

「ある訳ねえと思うだろ。ところが、そのまさかなんだよ。正真正銘、言葉通りのそのまんまさ。どんなモンだろうが関係ねえ。呪術でも幻術でも術者が使う術なら、たった一度見ただけで完全に自分のものにしまうんだよ。真眼持ちってのはさ」

角端は不自然に言葉を切ると「怖えよな」ぽつりと呟いた。

正直にわかには信じられない話である。これが麒麟から聞く話でなかったら、そもそも相手にさえしないようなお話だ。

「真眼の力は、時に高位の妖すら凌駕するものです」

炎駒は言った。

そんな力が脆弱な人という器に入り切るはずかないのだ、と。

「あれは本来人が持つべき力ではない。女の眼が存在しないと思われるのは、単に長生きできないからなのです。人は誰しも、程度の差こそあれ心中に闇を住まわせている生き物。その見たくもない心の内がみんな見えるというのは地獄です。それも物心付く時にはもう煩いぐらいに聞こえたり見えたりしてしまう。それを防ぐ手立てがないのでは、体の前にまず精神が持ちません」

考えたくもない話だった。十座はぶるりと身を震わせた。人がどれほど汚いものを身の内に宿す事ができるか、十座ほど知り尽くしている者はいるまい。

十座の心の闇は深い。それは時に自分でも顔を背けたくなるほどに醜く暗くおぞましい闇だ。冗談ではなかった。そんなもの知られたくないし、知りたくもない。

「耐えられませんね、俺にはとても」

「十座だけじゃありません。そもそも人に耐えられる力ではないのですから」

その優しい響きに十座の肩から力が抜ける。炎駒は穏やかに微笑むと、淡々と続けた。

「力というものは、制御できてこそ真の力。行使する力と抑制する力の両方があって初めて使える力となるのです。でも真眼にあるのは行使する力のみ。まあ、そもそも人に抑えられるような力ではないのですから始末に負えません。真眼持ちはどれほど苦しくても、目の前の人間の心の闇から目を逸らすことができない。拒むことができないのです」

「じゃあ真眼持ちはどうなるんだ」

ぞくりと嫌な予感に背筋が凍る。十座は思わず問い詰めるように身を乗り出した。

なぜこんな話を自分に聞かせるのか。麒麟の意図が分からない。まさか。

「妖や獣ならともかく、人になんぞ耐えられねーよ。大の男にだって無理なのに、よりによって年端もいかねえガキだぞ。耐えられずに死ぬんだ、心が」

吐き出すように答えたのは、黒い麒麟の方だった。

「真眼持ちが正気を保てるのは、精々もって十までです。それ以上はまず耐えられない。力の器たる体の方も、二十歳まではとてももたないようです。ひどい話だと思いませんか、十座」

炎駒はそう言って泣き笑いのような表情を浮かべた。

「真白はその真眼持ちです」

それはまるで静かなる嘆きだ。
経堂一ノ葉^{けいたういちのは}。

黒藍の双眸を持つ少女は、故郷の白い街でそう呼ばれていた。

秋濫と一ノ葉 1

荒れ果てた部屋の隅で、その子供はたった一人でうずくまっていた。

経堂秋濫が姉の家を訪れたのは、冬將軍の到来も近い、よく晴れた日の午後のことだった。

秋濫の姉、藍夏はもうすぐ四歳になる娘を置いて男と消えた。藍夏は本家当主の囲い者だったから、その娘は当主の娘ということになる。経堂の家は血筋を何より重んじる。それゆえ娘は本来ならば本家が引き取るのが筋だった。しかし、当主の妻である泗水はそれを頑なに拒否する。現当主には、泗水との間に二人の男子を含む計四人の子供がすでにいた上に、腹違いの子供を三人も引き取って育てていたから、泗水にしてみればもうこれ以上は我慢ならぬと、そういうことだったらしい。

本家の嫡男、流奏は眼だ。

流奏がいれば本家の血筋はほぼ万全であり、当主にしても妾腹のそれも女子である娘を、愠気のきつい嫁を怒らせてまで家に入れるつもりはなかったらしい。引き取りたいという秋濫の申し出は、特に反対されることなくスンナリと受け入れられたのだ。

藍夏の娘の名は一ノ葉といった。

その幼い姪を迎えに行った先で、秋濫は生涯忘れないだろう光景を目の当たりにすることとなる。冷え切った室内はひどく荒れ果

て、足の踏み場もなく。明かり一つない薄暗い部屋の隅っこに、その娘は小さい体をさらに小さくしてうずくまっていた。痩せこけて顔色が悪く、薄汚れた体からはなんともいえない異臭がした。そしてなによりその瞳。

大きく見開かれた双眸は、次の瞬間にはまるで見てはいけないうのを見てしまったかのようにあからさまに逸らされた。一瞬だけ見えた瞳の中には、幼い子供のものとも思えない深い懊悩の色があった。

「…なんて惨いことを、姉さん」

たった四年だ。秋濤は絶句した。この娘は、まだそれだけの年月しか生きてはいないというのに。その瞳に浮かぶあまりに深い絶望に、秋濤の心は引き裂かれそうだった。秋濤は思わず駆け寄ると、有無を言わさず一ノ葉をその腕に抱きしめた。その途端、

「うあ、あああああああああ！！」

一ノ葉は魂ぎるような悲鳴を上げ氣を失った。そうして丸二日目覚めず、秋濤を死ぬほど心配させたのだ。

「秋濤は私にかかわらない方がいい」

私みたいな化け物に。

目を覚ましてすぐ、一ノ葉ははつきりとそう言った。

痩せつぼちのひどい顔色をした小さな娘は、寝台の隅に身を押し付けるようにして小刻みにその身を震わせていた。一度も鉄を入られたことはないのだろう。経堂特有の薄茶の髪だけが、その痩せた体を包み込んでいる。その一際暗い両の瞳はさながら手負いの獣のようだった。少女は何もかも見透かすような眼差しを、その痩せた掌に落としたままで再度言った。

「私はもうじき壊れる。壊れたら、誰にも私を止められない。秋濤も傷つける。殺してしまうかもしれない」

そういうのは嫌だ。

と、少女は俯いたまま哀願するように両手を揉み絞った。

「だから、私にかかわらないで。元の場所に戻して。一人にして」「なぜ」

私の名前を知っているのか、と秋濤が問う前に少女は感情のない声で淡々と答えた。

「あなたの名前は経堂秋濤。経堂藍夏の異母妹で年は二十歳。双輪山の峠近くで一人暮らしをしている。あなたがどうして来たのか私は知っている。あなたが誰かも全部。そして私が何者なのかも」

ほんの少し見ただけで、色々な事を見透かされた。秋濤は驚いてまじまじと一ノ葉を見つめた。間違いない。この小さな娘は、何もかも「知って」いるのだ。

ああ、そうか。この冷えた海底のような瞳は。これが、

「あなたは眼なのね」

少女はこくりと頷いた。頑なに俯いたままで。

秋濤と一ノ葉 2

「秋濤は、私が女なのになぜ眼なのか不思議に思っている」

一ノ葉は相変わらず部屋の隅に張り付くように身を寄せて呟いた。視線は壁に向けたまま、頑迷なまでにこちらを見ようとはしない。眼である少女との会話は、秋濤にとって驚きの連続だった。なによりこちらが言葉を発する必要があるでないことに驚嘆する。本当に思っただけですべてが伝わってしまうのだ。

経堂の眼は代々男子にのみのはずだ。少なくとも、秋濤はそう聞いて育った。その疑問が脳裏をかすめた途端のその問いだった。

「正しくは私は眼じゃない」

秋濤の疑問はすぐに伝わった。口を開く前に一ノ葉が答える。

「経堂の女子に現れる力を真眼という。めったに生まれないから、経堂でも知っているのは本家だけ。秋濤は分家だから」

知らなかったのね、と秋濤は頷く。

成程それにしても、シンガンか。しんがんって、そういえばどういう字を書くのだろう。ふと、秋濤がそう心に浮かべると、

「真実の真に眼と書く」

打てば響くように答えが返って、思わず秋濤は微笑んだ。この子はとても聡い。それになんて便利なのだろう。こつも間違いない。持ちがチキンと伝わるなんて、そうそうある話ではない。秋濤が真剣に感心した途端、

「便利じゃなくて普通は気持ち悪いという」

そうきつぱりと返されて、秋濤は目を丸くする。ああやっぱりね、と独りごちた。秋濤は、自分が他人からどう思われているのかよく心得ているつもりだ。

分家の変わり者。

若い娘が華やかに装うでもなく同年代の者と交じわることもせず、たった一人で山に籠って日がな一日薬草摘みばかりしているのだ。当然と言えば当然の評価だった。

秋濤は薬師なのだ。

様々な薬草を採取し、煎じたり砕いて丸薬にしたりと何かと忙しい。元来、他人に合わせて生きるのが苦手な性分で、気楽な一人暮らしを楽しんでさえいたのだ。月に一度か二度、里に下りて薬を売る。病人がいれば見ることもあった。秋濤の薬は良く効くと評判だったので、日々の暮らしには困らなかった。

そうやって今まで淡々と生きてきた。不満も不足も特に感じたこともない。

ということとは、だ。

つらつら考えて秋濤は勝手に納得した。やはり自分は普通じゃないのだ。秋濤は素直にそう思い、それはそれで楽しくていいと結論付けてニコリとした。

「秋濤は……本当に変わってる」

一ノ葉が表情らしい表情を見せたのは、これが初めてだ。ひどく面食らったような、なんとも頼りなげな顔でそれきり押し黙る。その顔が初めて年齢相当に幼く見えたので、秋濤はなんだか嬉しくて

堪らなくなった。そしてじつと目の前の少女を見つめ、ふふふと笑う。ああ、この子はなんて可愛いのだろう。抱きしめたらびっくりするだろうか。嫌われてしまうのは少し、いやものすごく寂しい。でも触りたい。撫で回したい。

秋濑の想いは次々と溢れ出して止め処がない。

「な、撫で、回す…」

「あ」

ハッと我にかえって一ノ葉を見ると、絶句したまま固まっている。ぽかんと口を開けた顔は、どこから見ても幼子のそれで。

「えっと」

秋濑はもう我慢できなかった。

この胸に渦巻く気持ちを、どうしても自分で伝えたい。だからできる限り早口で言った。心を読まれてしまう前に、心で伝えてしまいう前に。自分の口からちゃんと言葉で伝えたい。そう思ったから。

焦れた拳句、初めに口から飛び出した言葉はだから「好きなの」というただ一言で。一ノ葉の更に茫然とした顔に、想いが次々先走る。

「私、一ノ葉が大好きなの。だからここに一緒に居てほしい。私は薬師だから、きっと一ノ葉の心も守れると思うんだ。たとえ守りきれないで一ノ葉に傷つけられても、私は絶対に後悔したりしない。私はこの通り頑丈だから、簡単には殺されたりしないよ。きっと大丈夫だから」

根拠なんてなに一つ示せなかった、それでも。
あなたに傍にいてほしい。

それだけは本当の気持ちで。一ノ葉が大好きだから、一人でいいなんて言わないでほしい。あんな寂しい所に戻るなんて悲しすぎる。私と一緒に生きてくれないだろうか。

言い始めたら止まらなくなった。秋濤は思いつくまましゃべり続けて、急に黙った。口を開けて固まったままの一ノ葉の顔を、心配そうに見る。

「えーっと、大丈夫？一ノ葉。…まあ、でもいいわ。なんたって気持ちはちゃんと伝わるんだもの」

やっぱり便利だとしみじみ言っていると、一ノ葉の顔がくしゃりと歪んだ。

「…秋濤は…本当に…私と、一緒に、いたい、の？　怖く、ない？」

私みたいな化け物。

か細い声は頼りなく、その細い体はフルフルと瘧のように震えている。逸らすことを忘れた眼差しには、わずかな期待と希望と。そして、それを上回る不安とが落ちつかなげに揺れる。

「化け物か。一ノ葉が化け物なら、そうね、うん、怖くないよ」

秋濤は躊躇わなかった。躊躇ってはならないと分かっていた。

「だって私一ノ葉が好きだもの。だから、化け物の一ノ葉と一緒にいたいわ」

それはまるで魔法のようで。

秋濫の言葉に嘘はない。なによりも心は決して嘘をつけないのだ。眞実の言葉は一ノ葉の心を緩やかに満たし暖めた。闇に半ば喰われかけた心がフワリと軽くなる。

綺麗だ。

一ノ葉はうつとりと目を閉じた。この人の心は、まるで降り積もる雪のように真っ白で、そして輝く太陽のように暖かい。生まれおちてから一度も心安らいたことのない一ノ葉にとって、人との接触は不快でただただ恐ろしいばかりだったのに。差し出した手が握り返される。柔らかく抱きしめられて心の中が温くなる。自分の両目から流れ続けるモノがなんなのか。一ノ葉はその名さえ知らなかった。

それから三年の間、一ノ葉は秋濫と一緒に暮らした。心を通わせ共に笑い共に泣き、その身に過ぎる力と折り合いをつける為、共に知恵を絞った。

そうして

一ノ葉が七歳になった年の夏、一ノ葉は経堂本家に連れ戻されることになる。

頑なに受け入れを拒否していた本家当主の妻が、不慮の事故で亡くなったのだ。一ノ葉は秋濫と引き離され、一人本家に戻されている。

一ノ葉が全身傷だらけのボロ雑巾のような姿で二頭の麒麟に拾われることになるのは、それからわずか一年後のこと。経堂の家で何があったのか、優しい麒麟たちに彼女はなに一つ語らなかった。語ったのは秋濫との暮らしと別れのみ。

経堂秋濫は一ノ葉を助けて死んだ。一ノ葉を生涯かけて守り通し、

断末魔の苦しい息の下でさえ太陽のように明るく微笑んで。

「生きて」

自分の分まで、と決して秋濤は口にしなかった。

別れの時、無数の矢に刺し貫かれ血で赤く染まった両眼は、しかし最後まで希望を失わうことはなかった。一ノ葉の目をしっかりと見据え、潰された喉の代わりに心で、秋濤は伝えた。

「恨まないで。人も、そして自分自身も」

自分は自分の分を十分生きた。悔いはない。だから、一ノ葉は一ノ葉の命を生きないといけない。

「あなたは化け物なんかじゃない。愛してる。私の可愛い　娘」

どうか、どうか幸せに。

声もなく唇が微笑みをかたどる。

残された力すべてで愛し子の背を押して、秋濤は最後の瞬間すら笑顔のままだった。

魂の形

「人という生き物はとても不思議です」

炎駒はゆるりと頬を撫でる。そうして思索に耽る哲学者のような眼差しをわずかに細めた。

「誘惑に弱く欲に忠実で自分のことしか考えず、浅慮で短慮で徳をないがしろにし、外見の美しさにはばかりかまけて魂の有り様には恐ろしく無頓着。倫理にもとる行為を平然と行つて仁道を踏みにじり顧みることもしない。そんな人間、この世の中には掃いて捨てるほどいます。かと思えば、欲を持たず他人を思いやり、深慮の果てに自身の命すら投げ出して一片の悔いも見せない者も、少ないけれど確実に存在する」

長身の聖獣は真つ直ぐな眼差しを十座に向けると、あなたの周りにもそういう人間がいたのではありませんかと静かに問うた。

「…どうして…なぜ、そうお思いになるのですか」

瞬時に浮かんだのは今はなき友の顔だ。

十座は瞠目し、浅く喘いだ。隠し切れない動揺は、その問いの正しさを何よりも能弁に表していた。

炎駒はふわりと破顔すると、

「そういう稀有な魂を持つ人間に愛された人間は見れば分かります。彼らはどんな穢れにまみれても芯まで穢れることがない。血にまみれ穢れを総身にまといつてなお、美しい魂の形を残し続ける。十座、あなたのように」

「…炎、駒」

絶句する十座に、炎駒はすべてを包み込むような笑顔を見せた。驚いたことに、すぐさま異を唱えそうな角端ですら、ほんのりとした微笑笑をその幼い面に上らせて黙って十座を見つめている。

「秋濤は奇跡のように美しい魂を持つとても強い人でした」

地央は奇跡のように美しい魂を持つとても強い男だった

赤い髪麒麟の言葉は、さながら天上の楽の音のようだ。

「その秋濤が愛した真白はだからすごく強いんだ。強くて最高に綺麗な魂を持つてる」

その地央が友とよんだ十座もまた強いんだ

優しい言葉に眩暈がした。

追従する黒い髪麒麟の言葉は、深い慈愛に満ちている。万感の思いを込めたこの言葉だけで、目の前の二頭の麒麟がどんな風に真白を見守ってきたのか、十座には分かる気がした。

麒麟は仁の生き物。

仁そのものの無垢な魂を、彼らはどれほどに愛で慈しんできたのだろうか。

「私と角端が死にかけていた真白を拾った時、あの子はまだたった八つだったんです。体も心もボロボロの傷だらけで、生きているの

が不思議に思えるほどでした」

「…誰がそんなことを」

十座はギリと齒を食いしばる。八つと言えば、十座は司馬家の総領として何不自由のない暮らしをしていた年齢だ。たとえどんな境遇にあらうと、守られるべき子供の年のはずで。

「そんなの経堂に決まってるだろうが。自分のことしか考えてねえ馬鹿どもが、寄ってたかって真白をあんな目にあわせやがったんだ」

夜色の瞳はやりきれない怒りに染まっている。

「真白は経堂の家でどんな仕打ちを受けたのか、私たちには決して言いません。言えば、麒麟である私たちを傷つけると思ってるんでしょう」

「…真白が、あいつが一体何をしたっていうんです。真眼を持っていたとしても、まだたった八歳の子供じゃないですか！」

たまらず十座は叫んだ。今の真白が傷つくだけでも十分に耐え難いのだ。頑是無い子供の真白がそれほどに痛めつけられる理由が理解できなかった。叩きつけるように言った十座は、だから返された答えに愕然と言葉を失うことになる。

「経堂は真眼持ちを同じ人とは思っていないからですよ。真眼だと知れた時点で、その子供は硬く拘束され死ぬまで監禁されます。光も碌に射さない地下牢に四肢を括られ閉じ込めて、生涯外に出ることもかなわない。誰だって自分の心の奥を読まれたくはないでしょう。特に、むごいことをしている自覚があれば尚のこと見られたくはない。そういうことです」

そうして経堂は罪の意識すら地下に埋め、汚い心に蓋をしてきた。あの美しい白い町が不浄のものをことごとく綺麗な石で覆い隠していたように。

「そんな…だったら、別に牢に閉じ込めなくてもいいじゃないですか。元々は人のいない山の中にいたんだし。他にやりようはいくらでも」

必死に言い募る十座を炎駒は悲しげに遮る。

「真眼は経堂にとり大事な資産。自由にさせる気などないのですよ。終生閉じ込めて、できるだけ多くの子を産ませる。真眼はそのための道具です。真眼の生む子は、ほぼ例外なく眼を持って生まれる。ただその為だけに、彼らは真眼を使うのです」

育てるのではなく飼うのですらなく「使う」のだと。淡々と炎駒はそう言った。

経堂において真白は壊れるまで使い込む有用な道具だったから。

龍の眼

「使うつて、そんな…真白は人間です！道具じゃない！」

「全くおっしゃる通りですが、経堂にとつては真眼は人ではないのです。経堂曰く、「人外の化け物」にかけける情けはないのだそうですよ」

化け物。

体中の血がザツと音を立てて引いていく。十座は青ざめたまま唇をかんた。初めて会った洞窟で自分は一体あの娘になんと言った。化け物妖物の類だろうと、そう言いはしなかったか。あの時、炎駒が怒ったわけがやつと分かった。十座は言葉もなく項垂れる。知らなかったですまされる話では断じてない。自分が不用意に口にした言葉を、あの時真白はどんな気持ちで聞いたのだろう。そしてあの夜、星空の下で真白はどんな気持ちで自分をそうだと言ったのだろう。泣きながら自分の胸を叩いた悲しげな瞳が浮かんでは消えてゆく。

「自分の心の中を覗かれた人間は深く傷つきます。そして、傷つけた相手を憎むようになる。それだけではありません。真白の能力を利用しようとする者、見当違いにも嫉妬する者。あの子はそんな人間の心の中の醜いものばかり見せつけられて生きてきたんです。そして、そうさせたのはすべて自分のせいだと思っている」

自分はいるだけで人を不幸にする。真白の言葉が鮮やかに蘇った。

「真白は、自分のせいで周りの人間が傷ついたって思い込んでんだ。そんなの全然ツ真白のせいじゃねえのに…全部あいつらのせいなの

に」

なんで、と角端は泣きだしそうに顔を歪めた。

「真白という名をつけたのは私たちなんです。本当に白く美しいのは、あの街ではなくあの子の心の方ですから」

どんな穢れも悪意も、少女の心を汚すことはできなかった。人ならぬものを見る麒麟の目には、真白の清浄な魂はまるで美しい真白の雪のように輝いて見えたのだ。

「経堂があの子を諦めないことは分かってました。元の名前ではあまりにも危険すぎた」

「でも、もう十年経っているんですよ。外見も変わっているし」

「そう……それでも油断できないほど経堂の真眼に対する執着は強いんです。一人ではとても山を下ろせません」

「くそっ、あいつら」

常闇の瞳が雷鳴とともに凄まじい色をなす。

「これで私たちが界斉に近づかない理由がお分かりいただけたでしょう」

赤い麒麟はそう言うと、少しだけ押し黙った。自嘲するようにその口元を歪める。

「許せないんですよ。経堂が、界斉が、そして真白を傷つけたすべての人間が私達は許せない。ご存じでしょうが、経堂の人間は皆薄い茶色の髪をしています。でも、私たちが見つけた時、あの子の髪は真っ白でした。あの子が味わった苦痛と恐怖を思うと、今でもは

らわたが煮えくりかえりそうになるんです。あそこに行ったら、私たちは私たちができる限りの方法ですべてを壊してしまうでしょう」「だな。…てか、まるつきり止められる気がしねーもん。俺、そんなのしたくねーよ」

普段過ぎるほど強気の黒麒麟とも思えないほどその呟きは弱弱しく。頂垂れ強く握りしめすぎた両手が軋む音が悲しい。

「あの子は優しすぎる。人が傷つくくらいなら自分が傷つく方を簡単に選んでしまう程に」

優先順位はいつだって他人が上だった。幼さの残る顔、細い肩。真つすくな目をした少女は、その優しさゆえ常に誰よりも深く傷ついていた。

真白は強い。

そして、その強さはとても悲しい強さだと十座は思った。

消えない傷を負ってさえ、真白は他人が傷つくよりも自分が傷つく方を選び続ける。それがどれほどの麒麟たちの心を傷つけてきたのか知りもせず。慣れているから。その一言で。大丈夫だと軽く笑って。

心の傷は体の傷よりも軽いと、真白、お前はそう思うのか。

やるせない十座の心の内を知ってか知らずか。炎駒は不意に真顔になるとうって変わった口調で言った。

「ああ、それからこれだけは言っておきます。真白はあなたの頭の中なんか一切見てませんからご安心を。それは私たちが保証します」「たりめーだろ。こいつの頭の中なんて、どうせ碌でもないことばっかに決まってるんだ。そんな小汚ねえもん見せたら真白が穢れるっ

っの」

角端が腕組みしたまま下から睨む。

「…えっ…や、しかし、真眼は抑えられない力だと。…ああ、あなたたちが抑えているんですね」

霊獣の神威が真眼の力を抑えている。だから、真白はここで穏やかに暮して居られるのだと十座はそう考えたのだが。

「違いますよ。私達にそんな器用な真似できるはずないじゃないですか」

意外に大雑把らしい麒麟はニヤリと笑うとあっさり否定した。

「真眼を抑えられるのはこの世で真眼使いだけです。でも大丈夫ですよ。真眼は制御不能ですが、真白はそれとは全く別の力を使って抑え込んでいますので」

「別の力って…なんなんです、それは」

訳が分からない。訝しげに目を眇める十座に、炎駒はあくまで穏やかにこの日最大級の爆弾を投下してのけた。

「龍眼です」

龍眼。その得たるもの、並びなき呪術の使い手とならん。雷を使役し、天の理をわがものとするなり。

真実の眼と龍の眼。

天を得るとまで言われる稀有な力の使い手は、世界の行く末すら

思うがままのその力を決して解き放とうとはしない。地位も名誉も財産も、人の命すらほしいままにできる力を持ちながら、真白はたった一人、この山深い場所に居る。

十座の脳裏に浮かぶ黒藍の双眸は誰よりも寂しげで優しく、やはりどうしようもないくらい孤独だ。

約束という名の鎖

ああ、また 来る。

(こ、わ、い)

少女は両手で自分の体を抱きしめると、部屋の隅にギュツと縮こまった。震えは止まらない。瞳を閉じたところで無駄なことは分かっていたけれど、恐ろしくてとても開けてはいられなかった。

(こわい)

ああ、もうすぐそこまで来ている。

ソレはまるで鋭い刃物のようであり、生ぬるく張り付く血のりのようであり、腐臭を放つ汚物のようでもあり、そして少女には決して逃れることの出来ないモノであった。

恐ろしく邪なモノ。

(こわいこわいこわいこわい)

遠くで蠢いていたどす黒いモノたちは、徐々に形をなして少女の元へと押し寄せてくる。はつきりと感じ取れるのに逃れる術はない。固く閉じていた筈の唇がカタカタと鳴る。力を入れすぎて白くなつた指先が、それに合わせるようにぶるぶると震えだした。

ああ、もうすぐ側に。

いる。

(いやだいやだいやだ、こわいこわい)

更に強く身を縮めて、それでも助けてとは口にしない。助けのないことを、助け手などいないことを少女は知っていたから。少女はたった一人、部屋の隅でひたすらに待っていた。

恐ろしいモノがやってくるのを。

そして、恐ろしいモノが去っていくのを。ただ、じつと身を固くして待ち続けた。

それは、さながら地獄の業火に炙られるようで。じわりじわりと耐えがたい痛みがその身をゆっくりと犯していく。

「全く、なんて可愛げのないガキなんだろう。親がそんなに怖いかい！」

（こんな恩知らず、生まなきゃよかった。薄汚くて、なんてみつともないんだろう）

少女の頭の中に、どす黒い悪意の塊が容赦なくねじ込まれる。その瞬間全身を貫く痛みを、少女はいつも唇を噛んでやりすごそうとするが上手くできたためしはなかった。

今も、また。

生きながら身を焼かれる苦しさに、少女はたまらず身悶え身をよじる。

「男だったらまだしも、よりによって女じゃねえ」

（役立たず。無駄飯ぐらい。早く死んでしまえばいいのに）

「こんな愛想のかけらもない陰気なガキ」

（使い物にも売り物にすらなりやしない。いつそのこと殺してしま

おうか)

ヒツと思わず声を上げれば、恐ろしいモノは気味悪げに眼を眇めた。

(なんて気味の悪いガキなの。まるで人の心を読んでるみたいで薄気味悪いったらない。化け物化け物化け物化け物)

と、

ゆつくりと目の前の恐ろしいモノが形を変え始めた。妖艶な女から年若い男へ。それに気づいた少女の体の震えが更に大きくなる。ただでさえ血色の悪い顔は、今や青を通り越して紙のように白い。

「俺は認めない」

(こんなガキが俺より力が強いなんて絶対に認めない。許さない)

「俺は、俺こそが眼だ」

(全部でたために決まってる。こんなヤツに俺が心を読まれるはずがない。化け物化け物化け物化け物)

「あ、あ、あ、あ、あ」

(ごめんなさい　許して、母さま、兄さま)

引き攣るような声を上げ、それでも少女はひたすらに耐えた。邪なモノがゆつくりと、でも確実に自分の心を喰らっていくのを見ながら身じろぎもせずに。

母が、兄が元から邪なモノだったのではない。

（そうさせたのは私）

悪いのも全て。

（私が、こんな、化け物、だから）

これは罰だ。

沢山の人を苦しめた自分が受けるべき当然の。だから、どんなに怖くても我慢しないといけなかった。それがどれほど耐えがたい痛みを伴っていたとしても。

唯一の希望は、それが長くは続かないということ。

こうして少しずつ蝕まれていけば、苦しみも痛みもいずれは跡形もなく消えてなくなる。なくなってしまうえば終わる。楽に、なれる。

（一ノ葉）

柔らかく呼ばれて、少女は瞼を震わせる。

（真白）

続けて優しい声が二つ。その途端、胸にほわりと灯がともる。じわじわと体の奥のほうから温かいなにかが湧き上がって、そうしてやっと少女はゆるりと体の力を抜いた。

自分には過ぎる温もりに泣きたくなくなる。これだけでもう十分だった。

（私は生きる。生きられる）

例えばそれが夜毎繰り返される責め苦に耐えるだけの生だとしても。

約束をした。

秋濤　あの優しい魂を持つ人と。絶対に生きる事を諦めない。
本当は、すぐにでも側に行きたかったけれど。

約束をした。

炎駒と角端　あの優しい麒麟たちと。絶対に死んだりしないと。
本当は、自分の命なんかどうでもよかったのだけれど。
約束は少女とこの世界を繋ぎ止めるただ一本の鎖になった。

鎖は強固で、同時にとても脆い。
容易には切れまいが、切れる時にはあっけなく切れると知っている。
る。

（最後の時が訪れるその時は、だからお願い、秋濤）

私を連れて行って。

「一人に……しないで」

一人の夜は寂しくて、それだけで全てを終わらせてしまいたくなるから。

伝わる熱

「一人に……しないで」

「……………しない」

だから泣くな。

優しい呟きとともに握り返された掌は、大きくて温かった。伸ばした指が掴んだ予想外の熱に、真白はホッと息を吐いた。途端になだれ込んでくる力強い気配はなんとも心地よく。

なんだろう、胸がほかほかする。

真白は夢うつつのまま首を傾げた。その拍子にツウと頬を伝う何かを、硬い指先が優しく拭う。その丁寧な仕草は、まるでそう、宝物でも扱うような。

宝物？

馬鹿げてると思いつつ胸が震えた。なぜ今日に限ってこんな気分になるのだろう。自分が見たのはお馴染みの悪夢だったはずだ。なんだかひどくふわふわした気分に襲われて、真白はゆっくりと目を開いた。

「……………十座」

開いた目に飛び込んできたのは、ここ数週間ですっかり見慣れた仏頂面だった。真白は弾かれたように寝台から身を起こした。結果、吐息がかかるほど近づいてしまい、あっと思った瞬間には目にも留

まらぬ早さで身を離される。

十座は強張った顔をしていた。

「あ…………ご、めん」

空けられた距離に不意に泣きたくなる。申し訳なくて切なくて、真白は俯いて唇を噛んだ。自分みたいな化け物は嫌がられて当然なのに、どうして忘れていたんだろう。

「本当にごめん。気持ち悪かったよね。ごめんね、十座」

「…………なぜ謝る。全く、お前は…いや、違うな。悪いのは俺が」

自嘲の響きに、真白は驚いて顔を上げた。十座は少しも悪くない。悪いのは考えなしに近づいた自分だ。真白は注意深く心を研ぎ澄ましてみた。忌まわしい真眼の制御は今のところ完璧だ。お陰で心の声は聞こえないが、波動のような感情の残滓だけは感じ取る事が出来た。

十座から洩れ出るのは悔いる気持ち。そして、真白を気遣う温かい想いだ。

なんで。

真白は目を見張ると、

「何言ってるの、十座？別に十座は」

「悪くないとか言うなよ。今、この状況で俺とお前とどっちが悪いかが聞かれれば、誰が見たって悪いのは俺だ」

空けた距離をあつさり詰めながら、十座はひどく真剣な面持ちで自分の手　真白の手を握ったままの自分の右手だ　をじっと見

つめている。麒麟に殺されそうだ。そんな事を真顔で言つて、それでもその手を離そうとしない。重なつた掌からじんわりと伝わる熱に急かされて、真白は慌てて口を開いた。

「ち、違う。悪いのは私。十座は」

悪くないと言えなかった。正確には、怖い顔をした男前が目で殺す勢いで睨みつけて言わせなかった。真白は戸惑つて十座を見上げた。かち合つた視線は長いことそのまま。なにかを耐えるようにギョツと眉間に皺を寄せた十座が、ぎこちなく明後日の方向を向くまで外れる事はなかった。

「あの、十座？」

本当にわけがわからない。いつもと違う十座の様子に、心がざわざわとざわめいて落ち着かなかった。だが、落ち着かないのはどうやらこの目の前の男も同様だったらしい。

「……あー、もういいからお前は黙つてろ。別に俺は怒つたわけじゃない。逆だ、逆。その……今は突然だったからちよつと動揺しただけであつて、断じて気持ち悪いとかそういうのではないんだ。というよりむしろ嬉しいくらいで……って、いや、違う！ そうじゃない！……くそつ、だから、つまり、俺が言いたいのは、だ」

ガシガシと髪を掻き耄り、不自然に視線を泳がせた拳句、十座が口にしたのは、

「……………大丈夫なのか」

驚いたことに気遣う言葉だった。

思い合う

婦女子の寢室に無断で入る暴拳に出たのは、その声がすすり泣いているように聞こえたからだ。虚空へと伸ばされた白い指先は頼りなく揺れて、捕まえておかなければすぐにでも消えてなくなりそうに恐ろしかった。だから、その手を掴んだ。振りほどかれると思っただが、そうはされず。為すがまま包み込まれた掌はしつくりと手に馴染んで、そうなると今度はどうしても離せなくなった。

何をやってるんだ、俺は。

自分でも呆れるが、やめる気にならないのだから仕方ない。らしくない行動の理由を考えるのは後だ。逡巡した拳句、十座はとりあえず目の前の心配事に向き合うことに決めた。

「……………大丈夫なのか」

何が、と麒麟ならば聞いただろう。不器用にすぎる男は、いつもどこか言葉足らずだ。

「は？」

拳動不審な上、珍しく饒舌な男のよく分からない気遣いに、真白はポカンと口を開いた。

「は、じゃない。だから、……………お前、大丈夫か」

気分はどうなんだと問うやけに真剣な顔を、真白はキョトンと目を開けてまじまじと見つめた。

「大丈夫って……ど、どうしたの、十座。何か問題でもあった？」

なにしろ真白には心配される理由がよく分からない。問題はむしろ十座の方だと思うし。つらつら考えてみるに、この生真面目な男が他人の部屋に無断で立ち入ったことからしてすでに変だ。もしや自分が暢気に寝ている間に、不測の事態でも起きたのだろうか。真白は急に不安になる。だが、目の前の端正な顔に特に目立った外傷はない。詰めていた息を吐き、真白は安堵の笑みを浮かべた。

「…よかった。とりあえず怪我はないんだね」

「怪我？…あー、またお前は余計な心配を…俺は無事だ。怪我なぞないし、なにも問題はない。そんなことよりお前だ、真白」

チツと舌打ちの後、ハアと大きなため息が聞こえた。

「ひどくうなされてたぞ」

本当に大丈夫なのか、と十座は真剣な顔をしている。真白は両の眉を寄せた。

「なんだそんな事か。大丈夫だよ。ちよつと夢見が悪かっただけで大したことないし。それよりも、十座の方こそ大丈夫なの？もしかしてなんか悪いものでも食べたとか。それがどっかに頭でもぶつけた？」

酷くやわらかい、不思議なほどに温かい感情に包みこまれて、実のところ真白は内心大いに混乱していた。この綺麗に整った「気」は間違いなく十座のものだ。それが、にわかには信じ難いほど優しいのはなぜなのだろう。

「悪いもの食べたとかぶつけたとか、俺は子供か。…俺が心配するのがそんなにおかしいか」

「別におかしくはないけど。それより、ねえ、なんで十座ここにいるの」

内心の戸惑いのまま、真白は聞いてみた。十座から伝わる感情は劣るようで、やはりやけに優しい。さっきから感じていた柔らかいものが目の前の青年から溢れてきたのだと知るにつけ、当惑の度は増すばかりだ。握った手もどうしてか離す気はないようだし。

まあ、振りほどかない私も私だけだ。

何か、あったんだろうか。真白は十座をじっと見上げた。

苦虫を噛み潰したような仏頂面が、この男の本質を表すものではないと知っている。

本当は優しいのだ、この人間　十座は。

そんなこと初めから分かっていた。妖を躊躇なく切り捨てていたあの時でさえ、かすかに漏れ伝わる魂の色は痛々しいほどに美しいものだったから。

真白は感覚をわずかに研ぎ澄ましてみた。感じるのは清浄で澄み切った、人が纏うものとは明らかに異なるお馴染みの気配　麒麟の気。

「　ああ、そういうこと」

真白は苦笑するしかない。十座をそそのかしたのは麒麟だ。あの気の良い聖獣たちは、いつだってとても過保護なのだから。

「で、炎駒と角端は十座にどこまでしゃべったの」

あえて軽い調子で聞けば、十座はひどくばつの悪そうな顔をした。

「あー、やはり隠せないか。…まあ、それは、色々だ。龍眼のことも聞いた」

「そんな事まで言っただ、あの二人」

「ああ……すまん」

「なんで十座が謝るのさ」

「ああ。だがすまん」

「もう良いよ。大したことじゃないし。もうずっと昔の話だし」

やっと腑に落ちて真白はため息をついた。十座は同情しているのだ。どちらかといえば、おぞましいだけの話を聞かされた十座こそ同情されてしかるべきだが、この顔ではそんなこと思ってもいないのだろう。さぞ不愉快な思いをしたろうに、やはり十座はとても優しい。

だから。

勘違いしてはいけない。真白は自分に言い聞かせる。この優しさを向けられていい相手は、自分ではないのだ。ツキリと痛む胸を、真白はかすかに微笑んで強引に無視した。

「もう嫌だなー。そんなに心配しなくても、私が貰ったのは龍の眼だけで龍爪刀は貰ってないよ。嘘じゃないって」

冗談めかしてなんでもない風を装ったのに、情けない事に声が震えた。たまらず俯けば、ポンポンとなだめる様に頭を撫ぜられて今度は息が止まりそうになる。

「何を誤解しているか知らんが、お前の事は信用している。疑ってなぞいない。あのなあ、真白。俺はそういう心配をしているわけではないんだ。俺が案じているのは、お前の体調だ」

本当に大丈夫な人間があんな顔するか、と。

「な、にを」

「お前………だから、本当に大丈夫か」

照れくさそうな横顔を、真白は痺れるような思いで見つめた。十座の体から溢れ出すような優しい感情の波が、真白を包み込むように揺れる。このむずがゆい感情は、決して不快なものではない。じわりと、甘い衝撃が全身に波紋のように広がっていく。

そうか、私は。

真白は胸に手を当てた。仄かな情動がひたひたと、ひたひたと迫る。喉元まで競り上がる台詞を辛うじて飲み込んで、真白はなんとか笑みを浮かべた。

「心配ないって、本当に、大丈夫。ありがとう、十座」

「別に礼を言われるようなことは何もしていない」

この人は照れるとひどく子供っぽくなる。そんな些細な事にも胸を締め付けられるくらい。

好きだ。

この綺麗な顔をした、残酷であろうと無理ばかりしている優しい人が好きだ。思いはスナリと胸に収まり、容易には消えてくれそ

うになかった。

これはあつてはいけない気持ち。

そんな事は分かっている。十座に相応しい人間は、断じて自分のような化け物ではないのだから。醜い化け物の身で、それでも側に居られて、氣遣ってもらつて幸せだ。この優しい人の役に立つなら、この苦痛に満ちた生すら意味があると思えるほどに。

それくらい、私はもう十分に幸せだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0060n/>

聖獣の愛し子

2011年3月23日01時39分発行